

論説：

植民地後期ジャワ製品煙草研究序説

植村泰夫

はじめに

煙草は 16 世紀末にインドネシア群島へ持ち込まれたが [Jonge 1988:91-92 ; C.E.I., vol.1:113-115; Reid 1985:535]、ジャワでは既に 17 世紀前半には栽培がかなり広範に行われ、宮廷貴族の間ではパイプを用いた喫煙が流行した⁽¹⁾。しかし 1658 年には刻んだジャワ産煙草をトウモロコシやバナナの乾燥させた葉で巻いた、ブクス(bungkus)と呼ばれた現地型巻煙草も登場し、これによって喫煙習慣は 17-18 世紀にはインドネシア中に拡大した [Reid 1985:535-538]。そして 19 世紀以降、喫煙が次第に一般化するとともに様々なタイプの煙草が登場し、輸入も拡大した。

小論ではそうした喫煙可能な形に加工された煙草を製品煙草、それ以前の段階のものを原料煙草、あるいは単に煙草と呼ぶことにする。そして様々な製品煙草の間でそれをめぐる諸条件の変化の下で、市場の獲得をめぐるどのような競合関係が

展開したかを、植民地後期(19世紀初~1945年)を対象に検討する。こうした問題については、これまでストローチェなど特定のタイプについては検討されてきたが、製品煙草全体を見通した研究はなかった。しかし、この問題は単に製品煙草消費の問題に止まらず、原料煙草の流通・生産の変化を検討する場合においても避けて通ることができない問題である。小論では、同時代に書かれた様々な調査報告、雑誌記事などを史料に、この問題に迫ってみたい。

それに先だつてこの時期に消費された主要な製品煙草の種類を概観すると、おおよそ表1のようになろう。各種製品煙草等の 1909-40 年の生産・輸入量の推移は表2に示した。同表の「丁字輸入量」の推移は、後述するようにストローチェの大半がクレテックであること、また輸入される丁字のほとんどはクレテック製造に使用されるので、ストローチェ生産量の推移を示すと考えてよい。

表1 植民地後期主要製品煙草概観

製品煙草の種類	原料	備考
シガ 輸入シガー		
シガ 輸入シガレット		
シガ 輸入シガレット		
シガ 輸入シガレット		
ストローチェ	ケルフ、巻葉に砂糖椰子若葉	White、クレテック・シガレット、クレンバック・シガレット/手作りと機械生産
カウン・ストローチェ (kawoeng strootje)	ケルフ、巻葉にニッパ椰子葉、安息香、大黃など添加	西ジャワ(ブリアンゲル)が主産地
ロコック・ワンゲン(rokok wangen)/(ロコック・ディコ) (rokok diko)	ケルフ、巻葉にニッパ椰子葉、安息香、大黃など添加	王侯領で製造、ディコは最初の製造者 Wirodiko に因んだ名称
クレテック・ストローチェ (krettek strootje)	ケルフ、巻葉にクロボット (klobot: 乾燥したトウモロコシ穂軸の包葉)、丁字入り	最も発展し、西ジャワ除くジャワ全域で製造、クドウスとブリタル、トゥルンアングが中心
シヤグ		
手巻き煙草・ストローチェ	ケルフ	工場製刻み、パイプ煙草などに利用

表註：ストローチェ(storootje)はオランダ語で、本来の意味は「表葉」。ここでは「葉煙草」とでもいうべき意味で、外巻に紙以外を使用した煙草をこのように呼んだ。

出所：栗林 1941, Reijden 1934, 1935, 1936, Soenario 1935, Darmawan Mangoenkoesoemo 1929 などから作成

表2 各種製品煙草の生産量・輸入量一覧

年	シガレット輸入量(億本)			シガレット生産量(億本)			丁字輸入量(1000トン)			ストロー ーチェ 生産量 (億本)	シガー輸入量(トン)		
	合計	ジャワ・ マドゥ ラ	外領	合計	機 械 生 産	手 作 り	合計	スマ ラ ン	ス ラ バ ヤ		合計	ジャ ワ ・ マ ド ゥ ラ	外領
1909	0.84	0.21	0.63										
1910	1.51	0.35	1.16										
1911	2.13	0.42	1.71				21.2	8.9	11.6				235
1912	2.81	0.62	2.19				11.0	8.9	1.5				258
1913	4.11	0.97	3.14				24.6	18.8	5.5			455.7	289
1914	4.79	1.38	3.41				29.4	21.5	6.4			459	
1915	6.39	1.87	4.53				42.8	31.2	9.6			403.7	
1916	7.92	2.38	5.54				50.6	44.4	4.4			396.6	
1917	11.56	2.66	8.90				45.5	42.8	1.5			287.7	
1918	15.45	4.63	10.81				29.3	24.7	3.9			285	
1919	21.61	7.87	13.74				35.2	31.2	3.6	14		354	
1920	28.29	11.30	16.99				18.5	16.4	1.8	17		174	
1921	44.09	20.54	23.35	4			53.7	47.7	2.5	14		293	149 144
1922	41.69	21.97	19.72	4			64.5	60.1	4.1	14		243	120 123
1923	45.40	25.63	19.77	8			59.1	56.5	2.4	18			126.7
1924	45.10	23.36	21.73	15.24	14.04	1.20	82.3	76.7	5.3	21			
1925	37.11	12.52	24.59	35			132.9	118.3	13.9	27			
1926	20.16	6.76	13.41	62			194.7	168.7	24.9	33			
1927	16.07	6.10	9.97	76			303.3	248.3	49.6	52			
1928	15.60	5.75	9.85	79			311.2	230.4	78.0	72		388.9	
1929	16.14	5.59	10.55	109		8.25	223.5	162.5	58.1	64.945		497.2	
1930	14.02	4.95	9.07	95		7.80	303.8	210.4	88.5	66.735		776.5	
1931	10.57	4.11	6.46	91	84	6.75	517.3	368.4	148.3	64.225			
1932	4.40	2.53	1.87	84	79	5.30	205.1	125.6	75.8	56.667			
1933	1.57	0.96	0.61	84.25	77.63	6.62	354.2	210.3	140.0	79.510	103		
1934	1.93	1.23	0.70		71.88	9.15	503.7	338.4	156.7	107.580	119		
1935	1.68	0.93	0.75	93.4	61.2	32.2	435.0	238.1	191.6	97.0	113		
1936	1.86	0.85	1.01	107.0	57.4	49.6	541.6	309.5	226.1	106.3	138		
1937	3.04	1.59	1.45		78		441.0	278.6	150.1	135.4			
1938	5.18	3.52	1.65		69		570.3	366.8	200.8	124.0			
1939	2.76	0.96	1.80	153	77		865.9	526.0	333.5	151			
1940	2.71	0.75	1.95	150.72	86.02	64.70	706.0	422.3	281.1	99.54			

表註：1924,29,30年手作りシガレット生産にはクローブ・シガレット含む

出所：ストローチェ生産量1929-34年はReijden 1936:141, 142, 1936年はI.V. 1937:143, 1939年は栗林1941:119, シガレット輸入量の1909,1910年はTabak 1925:bijlXXIIより計算, シガレット生産量の1939年機械生産は栗林1941:119, シガー輸入の1911-13年はV.H.N.L.1913:144, 1914-17年はV.H.N.L.1917:196, 1918年はV.H.N.L.1918:bijlII, 1919-22年はV.H.N.L.1922:148, 1923年はV.H.N.L.1923:179, 1928-30年はV.H.N.L.1930:380-382, 1933-36年はI.V. 1936:42, 他はC.E.I., vol.8:table XVII

これらの数字は様々な史料によってかなりバラツキがあり、その正確さには問題がない訳ではないが、おおよその傾向を掴むために利用することは可能であろう。

さて、この表からは次のような特徴を読みとることができる。第1に、シガレット輸入は20年代後半から急激に減少し、1930年代には極めて少なくなる。第2に、シガレット生産量は20年代後半から急増している。第3に、シガレットの中で「手作り」が1935年から急増している。そして第4に、ストローチェの生産は1920年代後半から急増し、

1930年代恐慌期にも増加し続けていることである。

ではこうした推移は、如何なる条件下で、どのようにして生じたのだろうか。以下では、ジャワにおける製品煙草製造の歴史をいくつかの時期に区分して、この問題を考えてみた。

1, ジャワにおける製品煙草製造の開始から第一次世界大戦まで

1、手巻き

刻み煙草(ケルフ)を購入し様々な上巻材料で手巻きすることは、庶民レベルでは最も原初的な喫煙方法だったと考えられる。なぜなら、内地市場向け煙草が栽培される地方に関する初期の史料の多くには、製品煙草を製造していたとする記述がない。例えば1890年にジャワ・マドゥラの各理事州で実施された経済調査の「原住民工業」の項目に、明確に「製品煙草」に関する記述があるのはスラカルタとレンバン、クディリのみで[K.V.1892:bijl.C]、1904~05年の『福祉減退調査』の報告でも同様である。またReijden[1934:52~53]は、西ジャワのバンテンでは1930年代に至ってもストローチェ産業は皆無であったことの原因として、「この地方では原住民煙草(rookartikelen)の消費者は長年にわたり、自分で使うストローチェは例外なしに自分で巻くという古くからの習慣に従ってきた」ことを挙げ、手巻きが古くから行われてきたことを示唆している。

2、シガレット・シガールの製造開始

こうした中で、ジャワで製品煙草の製造が始まったのは1850年前後のことだった。管見の限り、ジャワにおけるシガレット、シガール煙草製造に関する最も初期の記事はケドゥー理事州トゥマングン県に関するもので、そこでは既に1850年頃には地元の原料煙草からシガールが製造され、1000本当たり6~8ギルダーで販売され、スマランへも大量に移出されていた[Bleeker 1850-II:222]。この県では1881年にはシガレット工場が、ケドゥー煙草を中味にしたケドゥー・シガレットを製造していた[Reijden 1935:139~140]。1890年前後には華人、ヨーロッパ人企業家がシガールとシガレットを製造して周辺理事州へ販売しており[K.V.1890:bijl.NNN]、1890年経済調査ではヨーロッパ人シガール・シガレット製造業者が3人[K.V.1892:bijl.C]、93年にはヨーロッパ人2名と華人18名が「原住民労働者を

使ってこれに従事し…また華人工場主の若干は選別と包装にも同国人を使って」いた[K.V.1894:217]。さらに『福祉減退調査』などによると、県都を中心に立地するシガール製造業は主要産業の1つであり、華人とヨーロッパ人の企業家(Gatzen 某氏)の他に、6人の現地人企業主がおり、男女原住民労働者を使用して月に約25ギルダー稼いでいた。これに対してシガレット製造業は華人などが経営し、労働力として現地人女性を雇用していた[M.W.vol. VI^a, dl.1, 1909:91, 140~141; Rapport Nijverheid 1904 I:116~117; II:51; M.W.vol.VI^b, dl.2, bijl. 1909:bijl.5, 132~133]⁽²⁾。この理事州では1890年代にはマゲランでも製品煙草製造が行われ[K.V.1895:239]、1900年代にはシガレット、シガールの両方が製造されていた⁽³⁾。

レンバン理事州トゥバンでも、1850年代にシガールが製造されていた。最も早い時期の記事は「1856年にトゥバンのシガールが推定で50,000ギルダーほど製造・販売された」[K.V.1856:110~111]と述べる。この製造は「ジャワ煙草の一部は刻まれずに乾燥だけされて、華人シガール工場主に売られる。このシガール産業は拡大している。シガールは大半が華人工場主のところで働く原住民によって作られる。」「[K.V.1863:177]とあり、華人経営であること、現地住民が雇用されていること、原料はジャワ産煙草を葉煙草の形で購入していたことが分かる。また1890年にはトゥバン市に華人のシガール製造所が1軒あり、現地住民が40人ほど働いていたこと、製品は売れ行きがよかったことが報告されている[K.V.1892:bijl.C]。

1890年代半ば、トゥバンのシガール産業は拡大を始めた。当時、企業心豊かな一華人が既に非常に小規模にシガールを製造していたジャワ人のストラディオ(Soetoradio)に前貸しを供与したことが、そのきっかけだった。ストラディオはその後もこの華人との関係を保ち、見かけはマニラシガール風の低価格シガールを製造したが、農民の間で売れ行き

が極めてよかったので、新規にシガーを製造する企業家や職人が増加して競争が激化した[Jasper 1915:347-348]。こうして 1900 年代半ばには、現地人シガー製造者で営業税を査定される者が 155 人を数え、うち 100 人が県都に住んでいた。彼らは大半が華人商人から原料を 1 ピコル当たり 7 ギルダで提供され、シガーを固定価格で供出していた。中巻(dekblad)は彼ら自身で用意し、稼ぎは 1 日当たり 0.50~1 ギルダ、労働者の日当は 0.20~0.30 ギルダ、操業期間は年に 6~7 ヶ月だった。シガーは手作りだったが、シガレット製造では簡単な手動式器械(handtoestelletjes)使用が拡大しつつあった。仕上げには改善の余地が大きかったが、この産業は発展しつつあり、バタヴィア、スマラン、スラバヤ、パダン、バンジャルマシ、シンガポールへの移出が増加し(1895 年の 568kg から 1903 年 2,346kg に増加)、1000 本当たり 2.20~7 ギルダで販売されていた[M.W. vol.VI^a, dl.1, 1909:140-141; Rapport Nijverheid 1904 I:116-117; M.W.H. Rembang 371, 372, 376]。その発展ぶりは、「トゥバンのシガー工場は、相変わらずバタヴィアとシンガポールのバイヤーからの活発な注文を受けている」[K.V.1911:204-206]、「トゥバン県で製造されるシガーは、バタヴィアとシンガポールに十分な販売先を持つ」[K.V.1913:164-165]といった、1910 年代初の史料からも窺い知ることができる。この地域で製造されるシガーは、当初は Pambes、Silar、Sigagoek、Sompret の 4 商標だけだったが、1910 年代半ばには 100 ほどに達したという[Jasper 1915:347-348]。トゥバンは現地人シガー製造業の中心地となったのである。

この他、1850 年代にはジャバラ理事州でもシガーが作られていた。1853 年の報告は、「既に上で述べたように、1853 年の収穫は非常に豊作だった。すなわち 1852 年を 5,065 ピコル上回り、その生産を内地消費と大半をシガー製造のために使ったジャバラ理事州の 1 企業家を例外として、これらは

全てヨーロッパ市場向けに加工された。」[K.V.1853:166]と述べる。おそらくオランダ民間企業家がシガーを製造していたようだが、現在のところそれ以上の詳細は分からない⁽⁴⁾。

19 世紀末~20 世紀初には、スマラン理事州でも製造が行われていた。スマラン市では既に 1890 年にはヨーロッパ人経営の一企業(Glaser & Co)のシガー・シガレット・刻み煙草工場があり、蒸気動力と手労働により製造していた[K.V.1891:bijl. QQQ]。K.V.[1900:149]はここには 1899 年にもシガレット工場があったと述べているが、この産業はその後拡大したらしい。1907 年にはシガー工場が 6 軒あり、東洋外国人労働者 27 人、現地人労働者 645 人を雇用していたという[K.V.1908:bijl. AAA]。またサラチガ(アンバラワ)でもシガレットが製造されていた[K.V.1905:232-233; 1906:226; 1908:246]。この他、20 世紀初めにはバタヴィアにもヨーロッパ人経営のシガレット工場があった[K.V. 1905:232; 1906:226]。この工場は現地人労働者 50 名を雇用していた。

3、ストローチェ生産の始まり

他方、ストローチェの商業的生産が始まったのは、19 世紀の終わりだった。各地方毎の起源は表 3 にまとめた通りであるが、最も早く登場し最もよく広まったのがクドゥスのクレテック・ストローチェだった。この煙草は刻み煙草と丁字を混ぜたものをクロボット(乾かしたトウモロコシの包葉)で巻いたもので、一般に円錐形をしている。クレテックという名は、丁字が火を付けた時にパチパチと弾ける音から付けられたという[Mangoenkoesoemo 1929: 7; Soenario 1935:1-2]⁽⁵⁾。

この煙草の出現について、Reijden[1934:10]は、次のような伝承を紹介している。「この煙草と丁字の混合物の発明者はクドゥスの住民ハジ・ジャマフリ(Hadji Djamahri)なる者で、胸の病を患って重い咳の発作に苦しんでいた。この苦しみを取り去

表3 各地方におけるストローチェ産業の発生

理事州	発生場所・発生年	出所
バンテン	ストローチェ産業なし	Reijden 1934:52-53
バタヴィア	プルワカルタ 1911 年	Reijden 1934:56-57
バイテンゾルフ	1910-15 年の間	Reijden 1934:67
プリアンゲル	バンドン 1905 年、ガルット 1908 年、タシクマラヤ 1910 年	Reijden 1934:76-77
チェリボン	1929 年以前?	Reijden 1934:96-98, 109-110
プカロンガン	プマラン 1920 年	Reijden 1935:108-109
スマラン	1919 年	Reijden 1935:86-87
ジャバラ・レンバン	クドゥス 1900 年以前、ジャバラ 1929 年、パティ 1921 年、レンバン 1926 年、プロラ 1928 年	Reijden 1935:6-7
パニユマス	不詳(クレンバック・シガレットは 1925 年)	Reijden 1935:124-125
ケドゥー	マゲラン、ムンティラン 1900 年前後	Reijden 1935:139-140
スラカルタ	ソロ 1897 年、カラニアニヤル 1906 年、スラゲン 1908 年、クラテン 1911 年、ボヨラリ 1916 年、ウォノギリ 1920 年	Reijden 1935:152-153
ジョクジャカルタ	ジョクジャカルタ 1914 年、パントール 1919 年、アディクルト 1924 年、クロンプロゴ 1927 年	
クディリ	ブリタル 1909 年、トゥルンアグン 1922 年、クディリ 1911 年、ンガンジュック 1915 年	Reijden 1936:5-6
マディウン	マディウン 1915 年、ポノロゴ 1916 年、マゲタン 1930 年、ンガウイ 1931 年	Reijden 1936:74
ボジョネゴロ	ボジョネゴロ 1927 年	Reijden 1936:85
スラバヤ	家内工業生産は 1900 年頃、賃労働生産はスラバヤ 1928 年、シダルジョ 1924 年、モジョケルト 1927 年、ジョンバン 1921 年	Reijden 1936:95-96
マドゥラ	パラットダヤ(スムヌップ県) 1930 年	
マラン	家内工業生産は歴史が古い ⁶⁾ 、賃労働生産は 1924/25 年頃	Reijden 1936:106
プロボリンゴ		
ブスキ		

るため、彼は胸と背中への塗り薬として丁字油を使った。これはかなりよく効いたが、完全には直らなかった。しかし丁字を噛むと非常によく効いたので、彼はこの丁字の効果を体の内部に適用することを思いついた。このため、彼はストローチェ煙草に細かく刻んだ丁字を混ぜ、これを喫うことで煙を肺まで運べるようにした。この方法の結果は非常によく、この治療法はすぐに周辺一帯に知られるようになった。友人知人はこのようなストローチェでもてなされ、彼らは非常に満足したようである。その結果、これを混ぜた彼は、このストローチェをもっと作れという要望に驚くことになった。このように元々は薬と考えられたものが短期間に嗜好品になり、この仕事は続けられなければならないようになった。他の人々もいち早くハジ・ジャマフリの後に続き、こうしてストローチェ産業はクドゥスで始まることになった。]Reijden は、このハジは 1890 年にクドゥスで亡くなったので、この産業の出現は 1870-80 年の時期だと推定している。この伝承の真偽はともかく、この産業が

1880 年頃にクドゥスで始まったことは通説化している。

他方、王侯領では早くからニッパ椰子の葉で煙草を巻いたニッパ・ストローチェ(rokok nipah)が吸われてきたが、1890 年頃、スラカルタの王宮役人 Irodiko もしくは Wirodiko が煙草に混ぜ物をすることを考案し⁶⁾、それが広く知られるようになって多数の小企業がそれを賃労働で製造するようになった。最初の工場は 1897 年にソロで設立され、製品は発明者の名前にちなんでロコッ・ディコ(rokok diko)と呼ばれた[Reijden 1934:10-11; 1935:152-153]。ケドゥー理事州でもマゲランとムンティランでは 1900 年頃にニッパ・ストローチェが賃労働で生産されており、そこでは後になるとロコッ・ワンゲン(rokok wangen)⁷⁾の生産も始まったという[Reijden 1935:139-140]。また西ジャワで好まれたカウ・ストローチェの工場生産開始はやや遅く、1905 年にバンドンに設立されたのが最初だった[Reijden 1934:76-77]。

さて、表示のようにストローチェの工場生産が

第一次大戦までに始まったところは決して多くなく、生産量も表2の丁字輸入量から分かるように多くはなかった。それが急増するのは1910年代後半からである。他方、シガーやシガレットの輸入も、表4に示されるように増加に転じるのは1910年代に入ってからで、特にその後半に激増してい

る⁸⁾。こうしてみると、オランダ領東インドの製品煙草市場は第一次世界大戦期に転換期を迎えて拡大した、と考えることができる。そこで、次にその時期にどのような状況変化があったかを考えたい。

表4 シガー・シガレット輸入額の推移(100万ギルダー)

時期	ジャワ・マドゥラ	外領	合計	時期	ジャワ・マドゥラ	外領	合計
1870年代後半	2,409	900	3,309	1910年代前半	2,185	3,132	5,317
1880年代前半	2,800	1,215	4,015	1910年代後半	8,826	17,865	26,691
1880年代後半	2,324	1,154	3,478	1920年代前半	16,890	18,747	35,637
1890年代前半	1,673	1,267	2,940	1920年代後半	18,430	18,052	36,482
1890年代後半	1,722	1,407	3,129	1930年代前半	9,601	6,105	15,706
1900年代前半	1,059	1,114	2,173	1930年代後半	4,267	3,793	8,060
1900年代後半	1,257	1,328	2,585				

出所：C.E.I., vol.12a: table 5B

II、第一次世界大戦期のジャワ製品煙草産業の発展

第一次世界大戦は、ジャワのシガーやシガレットの製造が発展を始める契機になったと考えられる。植民地政庁工商局(Afdeeling Nijverheid en Handel)が1916年、17年に発行した報告書は「この製造は近年非常に急速に拡大してきた。」[Gegevens Nijverheid 1916:21]、「既に大戦前にこの地における産業分野の明確な発展を語ることができるが、1914年以後初めて、とりわけ輸入(特にシガーの輸入)が困難になり始め、輸入シガーと輸入シガレットの価格が上がり始めた1916年初以来、この産業分野は急速に発展することができた。」[Ontwikkeling Nijverheid 1917:26]と書いている。以下、この点をもう少し具体的に眺めてみよう。

「急速な発展」を直接的に示す製造量のデータはないが、1915年のジャワのシガレット工場数が65軒、労働者総数2,008人[V.H.N.L.1915:181]、16年1月1日現在のジャワ・マドゥラのシガー、シガレット工場が70軒、1,954人[Gegevens Nijverheid 1916:21]、1917年のジャワの工場数が推定80軒[Ontwikkeling Nijverheid 1917:26]という、工場数の

表5 1915年末現在葉巻・紙巻煙草工場

理事州	工場数	労働者数	
		総数	工場当たり
バンタム			
バタヴィア			
ブリアンゲル	1	50	50.0
チェリボン	1	30	30.0
西ジャワ計	2	80	
プカロンガン			
バニユマス	2	21	10.5
ケドゥー	24	893	37.2
スマラン	10	506	50.6
レンバン	13	198	15.2
ジョクジャカルタ			
スラカルタ	9	95	10.6
中ジャワ計	58	1,739	
クディリ			
マディウン			
スラバヤ	5	46	9.2
パスルアン	5	115	23.0
ブスキ			
マドゥラ			
東ジャワ計	10	161	
ジャワ・マドゥラ	70	1,954	27.9

出所：Gegevens Nijverheid 1916:bijlage

増加を示す数値からその一端が窺えよう。その地域分布は表5に示されるとおりであり、ケドゥー、レンバンなど以前からの中心地が依然として主導的な役割を果たしている。

このような発展の要因として、先に引いた1917年の報告は輸入困難による輸入シガー、シガレッ

ト価格の上昇を挙げているが、さらに詳しく検討してみよう。

まずシガーについて表2で1914~22年の輸入量を見ると、19年、21年を除いて減少傾向にある。恐らく、輸入の主力がオランダ産だったことが、その原因だったと考えられる。1917年の報告書は「オランダからのシガー輸入は報告年に大きく減り、後半期には意味がずっと小さくなった。販売価格は少なからず上がった。[V.H.N.L. 1917: 196]と述べている。逆に19年、21年の輸入増の背景は、オランダからの大量輸送だった[V.H.N.L. 1919: 223; 1921: 184]。したがって、第一次大戦末期にその輸送が船腹不足の影響を被ったことは、想像に難くない。

それでは、こうした状況下でジャワのシガー製造業はどのような方向へ向かったのだろうか。これについて、以下の報告は示唆的である。

シガー製造は、大戦中に大きく増加した。特に中ジャワ地方ではこの産業は大きな比重を占め、完全に華人企業家の手で行われる。ヨーロッパ人主導の工場はスマラン、スラバヤ、ジュンブル、ジョクジャカルタで拡大または再建された。これらの工場も原住民労働者を雇用しているが、彼等はヨーロッパ人職人の下でシガー作り職人、選別者、糊付け職人として、それぞれの分野で完全なヨーロッパ式方法で養成される。

オランダ製シガーとの比較試験に完全に耐えられるシガーが既に作られていることは、否定できないようだ。

1919年、内地市場はシガーにとっては特に良好ではなかったが、シガレットには良かった。オランダからの大量輸送や、マニラとの競争激化の結果、ヨーロッパ標準で操業する現地シガー工場にとって競争は厳しかった。特に良いブレンドのために必要な外国煙草の点で、不利だった。これらの煙草は直接輸入

されるのではなく、オランダ経由で、そこでまず様々な質によって選別されなければならなかった。

しかし現地産煙草だけから作る安物のシガーは、原住民の中で売れ行きが伸びた。

概して経済的な結果は1919年には前年までよりよかったが、外国との競争激化によって先行きは不安である。[V.H.N.L. 1919: 223~224]

ここから分かることは、①シガー製造は大戦中に大発展し、②主に華人とヨーロッパ人企業家によって担われ、③後者の工場ではヨーロッパ式のやり方で品質の高い製品も生まれていること⁽⁹⁾、④ただし、品質向上に不可欠なブレンド用外国産原料煙草確保の点で不利な立場にあったこと、⑤現地産煙草のみから作られる安物のシガーは、現地住民の中で売れ行き好調だったこと、である。このように、シガー製造は高級品志向と、質は落ちるが価格の安い製品への志向とに分極化しつつあった⁽¹⁰⁾。

しかし結局、高級品は十分には発展できなかった。1924年のある報告が、「シガー製造も徐々に拡大しているが、なお常に人が一般的に現地産シガーに対して抱く偏見の悪影響を受けている。これには、同じ価値の品質を持つ輸入シガーよりずっと安い販売価格を設定することで対抗する他ない。原料は十分確保できるが、上質シガー製造に必要な、上質ジャワ煙草、スマトラ煙草のみは阿姆斯特ダムの競りで購入しなければならない。[V.H.N.L. 1924: 180]と述べるように、品質面ではなお十分な評価が得られず、高級品に必要な原料煙草の確保にも相変わらず困難が伴った。この結果、栗林[1941: 133~134]が指摘するように、これ以降もシガーの高級品は専らオランダ本国から輸入されることになった。

こうしてジャワ産シガーは、専ら安価な製品の製造に活路を見出した。1920年の報告では「国内の売れ行きも伸びたが、これはシガーの喫煙が原

住民にも一層広がり始めたからでもある」[V.H.N.L. 1920:202]とジャワ内でのその市場の拡大が報じられ、22年報告では同年はシガー産業にとってよい年になったが、それはジャワ産シガーが外国製品よりずっと安かったので、外国産シガーの優位性がますます消滅しつつあるからだといわれる[V.H.N.L.1922:148]。こうして栗林[1941:133-134]が「蘭印(といってもジャワがほとんど全部である)で製造されるものは中級品以下、特に下級品が大部分」であるというように、価格の安いシガーはジャワ産シガーの主要製品となったのである⁽¹¹⁾。

次にシガレットの場合を検討しよう。輸入量はシガーとは対照的に1914~22年には急激に拡大している。これは「シガレット産業は概して外国、特に中国とフィリピンの競争を、シガー製造以上に受けている。」[V.H.N.L.1920:203]、「大量のシガレットが中国から輸送された」[V.H.N.L.1921:184]という記事からも窺えるように、シガレットが船腹不足の影響をあまり受けないアジアから主に輸入されていたことと関係があろう。中でも中国からの輸入は極めて多かった。Tabak[1925:195, 201, 217~218]によれば、シガレット輸入の圧倒的部分はB.A.T.(British American Tobacco Co.)と南洋兄弟煙草会社(Nanyang Brothers Tobacco Co.)が中国、香港の工場で中国産ヴァージニア煙草だけを原料に製造し、これらの会社が直接あるいはシンガポール、ペナン経由で蘭印に輸入する安い大衆向け商品であり、1923年のジャワ・マドゥラのシガレット総輸入量2,563,100kgのうち約200万kgは中国製だという。

したがって価格上昇も、シガーとは別の要因による。V.H.N.L.[1916:186]によれば、1916年には外国産シガレット消費が増えた結果、輸入は安物についても高級品についても増加し、ますます新しいブランドが流入したが、価格は原料と包装材料の高騰にもかかわらず変わらなかった、しかし「1917年にはかなりの価格上昇が始まるだろう

と広く予想されている。なぜなら、ヨーロッパとエジプトにおける煙草ストックは非常に多いという訳ではなく、マケドニア煙草、ルーマニア煙草の集散地であるカバラー(Kavallah)がブルガリアによる占領以降、閉鎖されたからである。」とあり、ヨーロッパに於ける大戦の影響が原料煙草価格に影響し、シガレットの価格も上昇したことが示唆される。

それではこのような状況の中で、ジャワのシガレット製造業はどのような方向に発展しつつあったのだろうか。以下、この時期の『商工農業報告書』の記事を追ってみよう。

第一次世界大戦が始まった1914年、ジャワのシガレット産業は景気が悪く、操業停止に追い込まれる工場さえあった。製品はほぼ全てが内地市場向けであり、価格は概して輸入品より安かったので競合しなかったという[V.H.N.L.1914:200]。ところが15年の報告には、満足できる状態で販売は拡大したが、「その一方で、安い外国産シガレットの輸入によって大きな不利益を蒙った工場もあった」[V.H.N.L.1915:181]とあり、安価な製品について輸入品との競合が問題にされる。16年になると、「シガレット産業は非常に大きく拡大し、とりわけケドゥーではたいへん大きな意味を持つようになったが、これはとりわけ輸入品価格が常に上昇していることの結果である」とされ、同時に輸出が大きく伸びたとされる[V.H.N.L.1916:203]。17年は輸入量が急増した年であるが(表2に従えば前年比146%)、「内地製造品への需要が報告年に大きく拡大したが、それは不十分な輸送量と価格値上がりの結果である」[V.H.N.L.1917:210]という。

こうしてみると、輸入増を上回る内地市場の拡大が進みつつあったといえるが、それはこれ以降もシガレット輸入が拡大していることから裏書きされよう。そして19年、20年もシガレット産業は良好な状態にあったが[V.H.N.L.1919:223-224; 1920:202-203]、それでも拡大した市場をめぐる輸

入品との競争は、相変わらず激しかったようだ。20年には「シガレット産業は既して外国、特に中国とフィリピンとの競争を、シガー製造以上に受けている。」[V.H.N.L.1920:202~203]、翌年には「多数の小規模で、大半が華人経営の企業が操業停止したが、外国との競争のせいでもある。すなわちシガーは大量にオランダから輸送され、その一方で大量のシガレットが中国から輸送された。」[V.H.N.L.1921:184]と述べられる。この21年の状況については『植民地報告』も、「シガレット製造業は拡大した。原住民のシガレット消費の拡大が、この製造業にいい影響を与え、これらは安いシガレットの製造に従事した。この産業はますます機械で操業する施設に集中しつつあるようだ。手作業で生産する多数の小営業が、停止した。この産業部門でも外国との競争は激しく、他の国の輸入は高い保護輸入関税によって妨げられている。」[K.V.1922:301]⁽¹²⁾と述べている。

これらの記述から、(a)シガレットの内地市場がこの時期に急速に拡大したこと、(b)それをめぐって輸入品と内地産品との激しい競争が展開されていること、(c)その中で安価なシガレットの製造が進展したこと、(d)機械生産が発展したこと、また(d)輸出は若干行われてきたが、相手国の関税障壁のために困難だった⁽¹³⁾ことが分かる。要するに、ジャワのシガレット産業もまた、内地市場向けの安価な製品を主力にすることで、発展を図ったのである。

したがって、ジャワのシガレット産業がさらに発展するためには、何よりも輸入品との競争に勝つことが必要だった。では、この競争はその後、どのように展開したのであろうか。次に、それを含めて1920年代以降のジャワの製品煙草をめぐる状況を検討しよう。

III、1920年代の状況の推移

1、煙草輸入関税の引き上げ

これまで述べてきたジャワのシガレット産業と輸入シガレットの激しい競争は、1920年代に製品煙草に対する輸入関税の大幅引き上げという、外在的条件の劇的な変化によって決着がつくことになった。

蘭領東インドでは1907年から1921年まで、あらゆる種類のシガーとシガレットに100kg当たり50ギルダーの輸入関税が課せられてきたが、1921年5月18日からこの関税は100kg当たり100ギルダーに引き上げられ(Stbl.1921 No.210)、シガレットについてはさらに24年6月6日から150ギルダーへと引き上げられた(Stbl.1924 No.192)[Tabak 1925:217]。

この時期のジャワでは、シガレット1本は煙草1gに換算されるのが普通だから、この関税値上げによって1本当たりの価格は21年には0.1セント、24年には0.15セント上昇したことになる。当時のシガレット輸入額は21年が2380万8000ギルダー、24年が2435万2000ギルダー、輸入本数は44億900万と45億1000万だから[C.E.I., vol.8: table XVII]、1本当たり価格は両年とも0.54セントになる。仮に輸入関税が全て消費者に転嫁されたとすれば、両年の輸入シガレット1本当たりの値段はそれぞれ0.64セント(税改訂前比で8.5%値上げ)、0.69セント(17.9%値上げ)になる。また当時、ケドゥーで操業していたMac Gillavry社の例だとシガレットは10本入りパック、20本入りカートンで販売されていたので[Tabak 1925:194]、これを基準に考えると1箱当たりの値上がりは前者の場合は21年1セント、24年1.5セント、後者では2セントと3セントになる。

当時の現地産シガレットの値段は不詳であるが、Hoogesteger[1933b:667]によると後述する1932年の煙草消費税導入時に、住民産シガレットの主力商品は10本5セントだったという。また、20年代初めのストローチェは25本入りパックが5セ

ントで買えた[Tabak 1925:198]。これらと比較すると、もともとやや高めだった輸入シガレットの割高感がさらに増したことは否めないであろう。表6はジャワ・マドゥラにおける1924年初-25年8月の、月毎の各種製品煙草の輸入量を示したものである。ここから明らかに、関税が値上がりしたシガレットのみ、新税率が適用された24年後半の輸入量が前半と比べて激減しており、また1~8月期を比較しても25年は半分以下に減っている。こうした数字の動きには関税引き上げが直接的な影響を与えた、と考えても間違いはない。

表6 1924-25年ジャワ・マドゥラ
月別各種煙草輸入状況(100kg)

	煙草と喫ぎ煙草		シガー		シガレット	
	1924年	1925年	1924年	1925年	1924年	1925年
1月	600	1,333	104	93	3,271	813
2月	1,020	610	104	84	2,748	793
3月	711	832	113	125	2,379	1,020
4月	887	1,173	107	101	1,741	1,741
5月	768	1,421	129	89	3,037	508
6月	1,043	993	92	136	2,875	1,244
7月	875	1,044	104	122	2,400	1,561
8月	1,378	1,581	99	127	1,002	1,133
9月	977		68		1,126	
10月	878		66		879	
11月	1,024		72		1,023	
12月	933		88		888	
1-8月	7,282	8,987	852	877	19,453	8,813

出所：Tabak 1925:Bijlage XXIV(209)

もつとも、シガレット輸入は表2から明らかのように、それ以降も20年代後半を通じて減少している。その背景には、この時期にジャワでシガレットの機械制生産が大規模に始まったことがあった。以下では、その発展について概観してみよう。

2. 機械制シガレット生産の発展

機械生産によるシガレット製造業の起源は1887年まで遡る[C.E.L, vol.8:171]。そして1909年にはB.A.T.が当地の煙草商社Anton Justmanの工場を引き継いで機械生産を導入したが、当時の内地市場は小さく生産は中止された。しかしその後、既に述べたようにシガレット消費は徐々に拡大し、その輸入は大きく伸びることになった。こうした動きに対応して、第一次大戦直前にミカエル(S.S.Michael)はチェリボンに工場を開いた[Vleming 1925:200; Tabak 1925:200]。さらに1918

年にはケドゥーのMac Gillavry工場が機械化した[C.E.L., vol.8:171-172]。この工場は1920年代前半、多数の企業が操業するケドゥーで最新式機械を装備した2つのシガレット工場の1つで、日産100万本が十分可能だが150万本への引き上げを計画中だった[Tabak 1925:193]⁽¹⁴⁾。

シガレットの機械製生産はその後も拡大し続け、1920年代前半の年生産量は40億本に達したが[Castles 1967:35]、この発展に決定的な役割を果たしたのがB.A.T.だった。輸入シガレットに対する「恐ろしいまでの輸入関税引き上げによって、安いシガレットの最大の輸入業者の1つが、この地で大規模に製造を始めることに踏み切った」[V.H.N.L.1923:179]とあるように、外国産シガレットの最大の輸入業者だった同社は、関税引き上げという状況の中で、ジャワでシガレットを自ら大規模に生産する方向に転換し、1923年にミカエル社のチェリボン工場を買収し、機械生産を開始したのである。チェリボン理事の1930年の引継覚書によれば、この工場は日産能力1,750万本と桁外れに大きな生産力を備え、従業員数は1,700名、原料煙草はこの時点では外国産を輸入していた[Memori Residen Cirebon 1930:252-253]。そしてこの工場の操業開始の結果、それまで輸入シガレットよりも小さかったジャワ産シガレットのシェアは急拡大し、1925年にはシガレットのジャワから外領向け移出がジャワへの外国産品輸入を越え、翌年以降、外領のジャワからの移入が外国からの輸入を越え始めた[Memori Gubernur Java Tengah 1930:11; Memori Residen Cirebon 1930:249]。

こうした中で、シガレット産業の発展にとって妨げとなる可能性のある事態が生じた。1926年6月26日の政令(ordonnantie: Stbl.no.260)によってシガレット用紙に輸入関税が課せられることになり、その額は面積が25cm²を越えるものは1m²当たり20セントと定められた。これは普通のシガレットの場合だと、1本当たりでおよそ0.044セン

トに当たった[Hoogesteger 1933b:666-667]。これに対してジャワのシガレット業界は当初は販売価格を引き上げたが[K.V.1927:236]、ストローチェとの激しい競争の中で販売が落ちたために、翌年には旧価格へ戻さざるを得なかった[K.V.1928:226]。ではこの時期、ジャワの機械製シガレット生産はどのように推移したのだろうか。表7は煙草用紙関税収入の推移を示しているが、機械製シガレットが使用するの表中のボビンという用紙である。これは幅をシガレットに必要な大きさに合わせた巻紙で、長さは数千メートルに達する。Hoogestegerはこの数字にもとづいて1927-30年の機械製シガレット生産量を表示のように推定し、この時期には(機械製)シガレット産業は大発展したと結論づけている。

表7 煙草用紙関税収入の推移(ギルダー)

年	関税総額	ボビン関税	ボビン以外	機械製シガレット製造本数
1927	2,986,377	2,459,604 (82.4%)	526,773 (17.6%)	56 億本
1928	4,877,954	2,931,131 (60.1%)	1,946,823 (39.9%)	67 億本
1929	5,594,644	3,639,420 (65.1%)	1,955,224 (34.9%)	83 億本
1930	6,207,563	4,412,106 (71.1%)	1,795,457 (28.9%)	100 億本

表註(原註): 機械製シガレット製造本数の推定は、輸入関税が1000本当たり10.44として計算
出所: Hoogesteger 1933b:667

そして、この発展過程は、寡占化の過程でもあった。V.H.N.L.[1929:197-198]は、1929年には様々な新しい小規模企業が参入し新しい商標のシガレットを市場にもたらしたが、それらの品質には改善の余地が大きく、また必要性が高い集中的な広告のための資本が欠如しているので、大企業製のよく知られたシガレットに互して地位を維持することは難しく、概してシガレット産業における小企業のチャンスはますます縮小しつつある、と述べている。こうしてこの時期には大手企業が生産を伸ばした。スマラン理事の1930年の引継書書によると、Oengaran 郡にある Mac Gillivary シガレット工場はこの10年間に非常に規模を拡大し[Memori Residen Semarang 1930:56]、最大手のB.A.T.は1930年にスマランに2番目の工場を開設した[Memori Gubernur Java Tengah 1930:11; Memori Residen Cirebon 1930:249]。また1932年には、第

2位の大煙草企業であるファロカ(Faroka)がマランに工場を設立した[MvO, Malang 1934:24]。こうして、1931年にはインドネシアで機械生産されるシガレットは60億本に達し、輸入(11億本)を遙かに上回るに到った[Castles 1967:35; C.E.I., vol.8:171-172]。

他方、手作りシガレットも表2にある1924年と29年の数字を比較する限りでは、この時期に全体としては生産を伸ばしているようだ。ただ、先にも引いた『植民地報告』の「この産業はますます機械で操業する施設へ集中しつつあるようだ。手作業で生産する多数の小営業が停止した」[K.V.1922:301]という記述に加えて、1925年に出された報告書には「機械生産と比べると、手労働で得られた生産物は各地で少なくない売れ行きがあるが、意味は小さい。輸入シガレットはそれを大きく後退させた。またこの地でますますシガレットの機械制生産が増加していることから、それは先の尖ったモデルを除き、手作りシガレットを完全に消滅させるであろうことが予想される」[Tabak 1925:200]とあり、また別の報告が「シガレット産業内の競争は一世界企業の設立によって非常に激しくなった。多数の小企業家がこれによって営業停止に追い込まれる見通しである。」[V.H.N.L.1925:157]と述べているところから判断すると、少なくとも機械製シガレットのような華々しい発展はなかったと考えた方がよいようである。事実、20年代末から30年代初めにかけては生産量は減少傾向にあり、機械製シガレットの1/10以下でしかない。それゆえ、1930年の『商工農業報告』では「この地のシガレット産業は2つのグループに分けることができる。すなわち機械製シガレットと、手製のクレテック・ストローチェである。」[V.H.N.L.1930:380]とあるように、その存在は無視されたのだった。

それでは、この報告で機械製シガレットと並び称せられたクレテック・ストローチェは20年代に

はどのように発展したのだろうか。次に、この点を考えてみたい。

3. クレテック・ストローチェ生産の拡大

既に見たように、ジャワのストローチェの主なものはクレテック・ストローチェ、カウン・ストローチェ、ロコツ・ワンゲンあるいはロコツ・デイクである。そしてこの時期にはクレテック・ストローチェは大発展したが、ロコツ・ワンゲンあるいはロコツ・デイクは製造がほぼ王侯領に限定され、1920年頃に最盛期を迎えた後は徐々にクレンバック・シガレット(煙草に大黃 klembak と安息香 menjam を混ぜたシガレット)に押しのけられていった。他方、カウン・ストローチェは1930年代半ばに至っても、なお西ジャワでは主要な製品煙草の地位を保っていた[Reijden 1934:12~13; 1936:139~140]。

表8は、1929~34年のストローチェの賃労働による製造本数を理事州別に見たものである。ここからさしあたり明らかなのは、中ジャワと東ジャワのストローチェの大半は、上に述べたことを踏まえるならばクレテックであるので、ストローチェ全体に占めるその比率は圧倒的であることである。対照的に西ジャワのカウン・ストローチェは極めて少ないが、これは必ずしも製造自体が少ないことを意味するものではない。Reijden[1934:11]によると、賃労働で生産されるカウン・ストローチェはごく僅かで、西ジャワでは自分で原料を用意して好みどおりにストローチェを巻く方がより好まれるという。そこで以下では、クレテック・ストローチェを中心に、話を進めたい。

まず表2の丁字輸入量から見て、クレテックの生産量が1910年代前半から後半にかけて倍増していること、20年代後半にはそれを上回るペースで激増していることが顕著である。これらの時期は、クレテック産業の大発展期だったといえよう⁽¹⁵⁾。また表3からは、賃労働によるストローチ

表8 理事州別ストローチェ生産一覧(100万本)

	1929年	1930年	1931年	1932年	1933年	1934年
バタヴィア	18.5	19.5	17.5	18.5	14.5	na
パイテンソルフ	17	13	9	10.5	2	na
ブリアンゲル	170	148	118	86	47	na
チェリボン	na	na	4	na	2	na
西ジャワ計	208.5	182.5	148.5	115	131	205
ジャバラ・レンバン	3,675	3,495	2,875	2,165	3,500	5,300
スマラン	275	360	405	295	500	510
プカコンガン	26	49	66	93	256	317
パニユマス	32	42	83	80	74	83
ケドゥー	179	167	167	154	320	400
王侯領	169	179	194	210	280	310
中ジャワ計	4,356	4,287	3,790	2,997	4,930	6,920
内シガレット	350	330	335	300	520	785
クディリ	2,100	2,310	2,560	2,500	2,730	3,715
マディウン	60	75	90	105	172	208
ボジョネゴロ	30	44	54	115	210	125
スラバヤ	560	545	440	335	370	395
マラン	5	10	15	30	70	105
東ジャワ計	2,755	2,984	3,159	3,085	3,552	4,548
内シガレット	475	450	340	230	140	130
合計	6,494.5	6,673.5	6,422.5	5,667.0	7,951.0	10,758.0

表註：西ジャワ各理事州の1933年概は上半期のみ。括弧内は中ジャワ計と東ジャワ計には手作りシガレット含む。合計には含まない。
出所：Reijden 1934:58, 69, 79, 99, 110; 1935:170; 1936:120, 142

エ生産開始が第一次世界大戦以降、それも20年代に始まった地方が多いことが明らかになる。

こうした点について Reijden[1935:166; 1936:139~140]は、クレテック・ストローチェの生産はその発生以来、長年にわたってクドゥスにはほぼ限定されてきたが、この製品に対する需要拡大がクドゥスの生産容量を越えた結果、1914年頃に東ジャワでブリタル、トゥルンアグンを中心としてこの産業が発生した、そして1925年以降、急速に中ジャワの北部全域、マゲラン県と王侯領の一部に広がったと説明している。また1930年に書かれたある報告書では、①小規模なクレテック・ストローチェ製造は古くからあったが、これがジャワの特定の中心地で最重要住民工業の1つに発展したのは1920年以降である、②近年の発展の特徴を要約すると、中心地はクドゥス、ブリタル、クディリとトゥルンアグンであり、先ずクドゥスで顕著な発展を遂げた後、他の地方へ拡大した、このストローチェの販路は主に東ジャワ、中ジャワに限られ、西ジャワではあまり評価されていないことである、と指摘される[Overzicht Ontwikkeling Inlandsche Nijverheid 1930:4~5]。要するに、クドゥスに限定されてきたクレテック製造が1910年代半ばから東ジャワでも本格化し、20年代半ば以降に中ジャワの他地域にも広がっていったのである。

表9 クドゥスから各地へのストローチェ輸送量合計(トン)

年	1919年	1920年	1921年	1922年	1923年	1924年	1925年	1926年	1927年	1928年
輸送量	1,723.85	2,032.50	1,790.15	1,796.70	2,405.90	2,685.85	3,116.60	3,729.65	5,457.95	6,496.00

原註：1921~22年の減少は不況の影響による

出所：Darmawan Mangoenkoesoemo 1929:44

それでは最大の中心地クドゥスにおけるこの時期の生産状況は、どのようであったのだろうか。20年代の正確な生産統計は存在しないが、これに代わるものとしてこれまでしばしば利用されてきたのが、表9に掲げたサマラン・ジョアナ蒸気軌道によるクドゥスから各地へのストローチェ輸送統計である。Mangoenkoesoemo[1929:45]によれば、トラック輸送がますます盛んになってきているので、この数字は総生産の一部を反映したものに過ぎないというが、いずれにせよ、この時期に生産が3倍以上に拡大していること見てとれる。

クドゥス産ストローチェの最大市場は、東ジャワだった。しかし西ジャワではカウン・ストローチェとの競争に勝つことができず、また中ジャワでもケドゥーヤ、プカロンガンを除くスマランより西側では売れ行きはそれほど芳しくなかった⁽¹⁶⁾。この他に、スマトラ、ボルネオ、セレベスにも移出されていた[Fruin 1930:439-440]。

これに対して後発の東ジャワでは、ブリタル周辺に1920年代後半に第2の拠点が形成された[C.E.I., vol.8:170]。このことは表2に示されるスラバヤ港経由の丁字輸入量(東ジャワのクレテック産業にはスラバヤから丁字が運ばれた)の急増にも示される。Reijden[1936:115]によれば、1925年頃まではクドゥスは東ジャワの着実な生産増加によっても何ら困難を感じることはなかったが、この年にブリタルとトゥルンアゲンのストローチェ産業が非常に大きな規模になり、初めて深刻な競争が問題になり始めた。その後、これに続く何年かにクディリ理事州におけるさらなる拡大と、同理事州内他地域へのこの産業の拡散によって、競争はより激しい形をとるようになったという。

東ジャワ産クレテックの主な市場は東ジャワで

あり[Mangoenkoesoemo 1931:9]⁽¹⁷⁾、したがってその発展はクドゥス産ストローチェの販路を一部奪うことによって実現した。その事情について、Castles[1967:35]は次のように説明している。クローブ価格は変動が激しく、1928年に異常に値上がりした⁽¹⁸⁾。クレテックは主に貧しい人々が吸うので、値上げすれば消費が急減し、恐らく価格が安定している"white cigarette"(添加物のない普通のシガレット)への乗り換えが起こる可能性があった。そこで、クドゥスの生産者の中には、この年により安い煙草や丁字を使用したり、丁字比率⁽¹⁹⁾を下げる者が現れたが、この結果、評判が落ちて東ジャワの生産者が東ジャワ市場を獲得したというのである。

このようにクレテック・ストローチェはその内部で競争を展開しつつ、全体としてこの時期に大きく生産を伸ばしたが、そのことによって他の製品煙草、特にシガレットとの間でも、先に少し触れたように極めて激しい競争が行われた。そしてこのような状況は、1930年代に入り世界恐慌の影響が現れるとともに一層複雑な形を取るようになる。次章では、その問題を扱うことにしたい。

IV、1930年代における製品煙草の推移

1930年代はジャワの製品煙草産業にとって、激動の時期だった。前半には不況によって、消費者の購買力が大きく減退した。これに加えて、植民地政庁は恐慌対策の一環として1932年12月16日、全ての製品煙草に20%の消費税を導入した(Stbl. no.517)。この税は36年にシガレットのみ30%に引き上げられ(Stbl.no.2)⁽²⁰⁾、さらに40年にはシガ

レットは40%、シガーとクロボットは30%へと再度改訂された(Stbl.no.392, 393)。また、シガレット輸入関税が引き上げられた。加えて1934年に制定された事業制限令(bedrijfsreglementeering-ordonnantie: Stbl.no.595)が、翌35年9月1日から機械製シガレット産業に適用された(Stbl.no.437)。これらは、ジャワの製品煙草産業にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

1. 輸入シガレットの終焉

まず挙げられるのは、シガレット輸入の激減である。表2に示されるように、それは1931年、32年、33年と連続して大きく減っている。これは輸入シガレットの価格がもともと割高であることに加えて、シガレット輸入関税の再引上げと関係が深い。すなわち付加税賦課により、1924年以来100kg当たり150ギルダーだった税額は31年1月1日から165ギルダー、32年1月1日から180ギルダー、同年6月15日からは225ギルダーとなった[栗林1941:195; Hoogesteger 1933b:666]。この結果、輸入シガレットはとりわけ不況下で購買力が低下した人々の中での販売が一層困難になったと考えられる⁽²¹⁾。なお、この税は後述する製品煙草の消費税が小売価格の2割から3割へと引き上げられた36年2月1日からは、ジャワ産製品煙草との釣り合いを考えて再び150ギルダーにまで引き下げられた[栗林1941:195]。36年以降の増加傾向は恐慌の影響が薄らぎ始めたこととともに、これとも関連があるかもしれないが、その売り上げを見ると表10に示されるように、シガレット全体の1割にも満たないし、輸入量は1910年代前半の水準にまで戻ってしまった。輸入シガレットは、蘭

表10 シガレットの種類別売上高

年	内地産シガレット		外国産シガレット		合計		
	手作り	機械製	シガレット				
1936	6,403	22.2%	20,022	69.4%	2,023	7.0%	28,837
1937	8,404	22.8%	25,748	69.9%	2,395	6.5%	36,852
1938	10,421	27.4%	24,787	65.2%	2,724	7.2%	38,005
1939	11,162	27.2%	28,066	68.5%	1,743	4.3%	40,971

出所: Verhooging 1940: 1294

領東インドの製品煙草市場の中ではもはや周縁的な地位を占めるに過ぎなくなったといえよう。

2. 事業制限令と内地産シガレット

(1) 恐慌の到来と内地産シガレット

恐慌の到来によって、内地産シガレットの生産は表2に示されるように、30年代前半には減少傾向が続いた。そのことは別の指標からも明らかである。シガレット用巻紙輸入量の推移を見ると、1928~30年には順に388,855kg、497,231kg、626,347kgと大きく増えてきたが[I.V.1931:205~206]、31年に376,779kgへと激減している。そしてこれと対照的に、この年には丁字輸入量は3,038,292kgから5,173,284kgへと激増しており、「東インド報告」はこの年には「安価なクレテック・ストローチェの消費が、より高いシガレットを犠牲にしてかなり増加した」と結論付けている[I.V.1932:140]。また翌年の報告も、あらゆる住民グループの購買力激減によりシガレット販売は様々な工場が閉鎖に追い込まれるほどに減少し、シガレットからより安いストローチェへの移行がはっきり見られるという[I.V.1933:150~151]。34年には、機械製シガレット工場の生産高は前年比で7%、販売額では12%減となった[I.V.1935:118~119]。要するに、住民購買力が低下する中でシガレット、特に価格が高めの機械製シガレットは、より安いストローチェに太刀打ちできなかったのである⁽²²⁾。

(2) 事業制限令の機械製シガレット産業への適用

しかし機械製シガレットにとって最大の打撃となったのは、事業制限令の適用だった。Oorschot [1956:43~45,47]によれば、この事業制限令は一般には①破滅的な競争の防止、②望ましくない産業の設立阻止、③特定の産業分野の発展速度を、商業政策の要求と関連づけて調整する、④経済的に弱い側を保護するため、同一産業分野内における極めて差が大きい産業形態(西洋工業に対する東

洋の工業)を相互に制限するという、4つの主要目的を持っていた。そして、これをシガレット産業に適用しようとした意図は、(a)B.A.T.の独占に導く恐れがある過度の競争の緩和、(b)ストローチェと手作りシガレットの保護、これらは(a)で述べた価格競争によってだけではなく、クレテック・シガレットを機械で製造するための技術の発見によっても、市場から押しのけられる恐れがある、(c)その生存を脅かされているクロボット生産者の保護、(d)シガレット工場の住民煙草使用を促進して住民煙草栽培を支援すること、の4つだったという⁽²³⁾。

こうしたことが必要となった背景は、Vries [1935:1434]によると次のようだった。ジャワでは当時、シガレット製造機械の台数はそれを1日8時間稼働させると生産量が消費量の3倍に達するほど多く、この結果、企業間では激しい競争が続く、シガレット、特に安い種類のシガレットの価格は継続的に低下し、数年前には10本5セントという価格が一般的だったのが、2~3セントにまで下がり、35年前半期には10本1セントのシガレットがますます流通するようになった。このことは機械製シガレット業者のみならず、他の製品煙草製造者にも悪影響を及ぼした。すなわち、最も安い機械製シガレットの価格が手作りシガレットやストローチェの価格帯にまで下がったことによって、後者の販売は困難になり、さらにクレテック・シガレットが機械によってストローチェの価格で製造されるようになったので、ストローチェはジャワ市場から押し出され南東ボルネオや南セレベスに市場を求めなければならなくなった。

以上要するに、機械製シガレット業者間の競争激化による価格低下の悪影響から手作りシガレットやストローチェ製造業者を保護する必要があると、植民地政庁が判断したのだった。こうして、この条令では機械製シガレットにのみ、生産の上限と最低価格が設定された。すなわち、シガレッ

ト生産を認可された者には各時期の推定消費量の一定比率の生産が認められ、10本当たりの最低価格が2,000mm³未満の最小のシガレット(liliput)について2セントに設定され、それより大きいものについては容積が400mm³増える毎に1/2セント上昇するものとされた。そしてクレテック・シガレットの場合には、最低価格は各形態ともに10本当たりで1/2セントだけ普通のシガレットより安く設定された。また、企業家は一定量以上(栗林[1941:139]では6割)の内地産煙草を原料として使用することが、認可条件の1つとされた⁽²⁴⁾。

この条令は、栗林[1941:121]によればジャワのみで1935年に25工場、38年には18工場に適用されたという。いずれにせよ、これによって機械製シガレット生産は35年、36年にも減り続けたのだった。

(3)手作りシガレットの大増産

他方、手作りシガレットは1933年から増加に転じ、35年には激増して30年代後半には機械生産と肩を並べるまでに成長した。その1929~34年の地域毎の製造本数は表11に示したとおりであるが、33、34年の増加は中ジャワ北岸と内陸が牽引したものだ。それはReijden[1936:142]によれば、33年についてはバゲレンにおけるクレンバック・シガレット大増産と王侯領のクレテック・シガレット製造が原因であり、34年はパニユマス、ケドゥー、スラカルタにおけるさらなる発展と、

表11 手作りシガレットの賃労働生産(100万本)

年	中ジャワ北岸	パニユマス・ケドゥー	王侯領	スラバヤ	合計
1929	152.0	186.0	12.0	475.0	825.0
1930	135.0	177.0	20.0	450.0	780.0
1931	100.0	202.0	33.0	340.0	675.0
1932	57.0	180.0	63.0	230.0	530.0
1933	52.0	310.0	160.0	140.0	662.0
1934	150.0	385.0	250.0	130.0	915.0

原註：手作りシガレットの西ジャワの生産は無視してよい程度。

出所：Reijden 1936:142

ジャワ北岸でクレテック・シガレット販売が増加したことによるという⁽²⁵⁾。

表2に示される35年以降の大増産の原因は、上述の機械製シガレットに対する規制により、手作りシガレットが再び価格面で優位に立ったことであると考えられる。1パックの小売り価格が1~3セントのものはほとんどが手巻き工場で生産されていたといわれる。1939年の手製シガレット製造本数は75億本と推定され、機械製シガレットとはほぼ等しくなった。製造所数は300に達したが、大半は華人経営で、大規模工場はジャワ人労働者4,000~4,500名を使用、1日400万~450万本を製造した[栗林1941:124~129]⁽²⁶⁾。

(4)1930年代後半における機械製シガレット生産の回復

1930年代後半に入ると、表2に示されるように、機械製シガレット生産は再び増加に転じた。この背景には、主として外領に於ける需要拡大があった。『東インド報告』によれば、「外領経済の回復によって、1936年の第4四半期には機械製造シガレットの地位に若干の改善が見られ」[I.V.1937:143]、翌1937年には生産額2480万ギルダーのうち、1880万ギルダー(75.8%)が外領での販売だった。規制対象工場の生産割当は需要増加との関連からたびたび引き上げられなければならず、機械製シガレット工場数は15に増加した(大規模工場5,小規模工場10)。また最低価格は、大半の工場についてはもとの水準に止められたが、小規模工場については手作り工場との競争に耐えられるようにするため、若干引き下げられた[I.V.1938:152~153]。

このような動きの中で、B.A.T.が圧倒的に優位を占めるという構造は変わらなかった。表12は1939年現在の機械製シガレット煙草生産を担った登録企業を一覧したものだが、栗林[1941:123~127]によると四大会社で機械製シガレットの98%を生産し、残り2%は手巻きを主とし

表12 1939年現在の機械製紙巻煙草生産企業

企業名	工場所在地
N.V. Handels vereeniging "Industria", "Dieng" ○	バタヴィア
Sigaretten Fabriek "Seraice"	ガルーマ
The Kian Boen Butenzorgsche Tabaksindustrie ×	ハイテンゾルフ
Sigaretten Fabriek Boegisredjo	ブカロロンガン
B.A.T. Co. Ltd., N.V. ○	スマラン、チェリボン、スラバヤ
N.V. Trio Sam Hien Kongsie	クトゥス
N.V. Tot Exploitatie van Cigarettenfabriek "Faroka" ○	マラン
Tjo Swie Lian, Soerabajasche Sigarettenfabriek	スラバヤ
Sigarettenfabriek Kwa Song Khoen	スラバヤ
N.V. Handel Mij, Samporna ○	スラバヤ
Sigarettenfabriek The Die Siang	トゥバン
Sigarettenfabriek "Indonesia" Handel merk "Marikangan"	スラカルタ
Narvang Bros. Tobacco Co.	バタヴィア
West Java Tabakindustrie Comaenie ×	バタヴィア

(○)は四大会社、×は廃業
出所：栗林1941：122~123

つつも巻上機1~数台を備えた小工場が製造したという。B.A.T.の年産は58~60億本、機械製シガレット生産の75%に達した。ファロカがこれに次いで約20%を占め、年産は15~16億本だった。また企業数はさらに減少しており、経営基盤の弱い企業が淘汰されていく傾向が依然として続いていたと考えられる。

3. 消費税と製品煙草

(1)煙草消費税の徴収方式

これまで述べてきた輸入関税引き上げ、事業制限令以上に、製品煙草産業に大きな影響を与えたのが、1932年12月16日の煙草消費税導入 [Tabaksaccijns-ordonnantie 1932: Stbl. no.515, 560] だった。その徴税はその製品煙草1パック当たり価格を記載したバンデロール(banderol)、すなわち帯封をパックに巻き、その価格の20%を製造業者が納入することによって行われた。製造業者はこのバンデロールをバタヴィアの税務局から購入しなければならなかったが、1日当たり生産がシガレットとストローチェは2000本以下、シガーは1000本以下、刻み煙草は250包以下、またはこの上限を超えない組み合わせの場合には、各地の郵便局で入手可能だった。33年2月末に政庁に登録されていた製品煙草製造工場主は2,108人だったが、そのうちでこれが可能なのは1,125人だった [Hoogesteger 1933c:1491]。

(2)生産形態への影響

消費税の影響は多岐にわたったが、まず挙げられるのはこれによって生産形態が変化したことである。C.E.I.[vol.8:170-171]は Reijden の調査報告をもとに、消費税導入の結果、家内工業はかなり急速に消滅したが、対照的により規模の大きな製造工場は家内工業消滅から利益を得ることができた、またそれと関連して 30 年代には家内労働から工場雇用へのシフトが特に中ジャワで顕著で、そこでは消費税がそれを促進したと指摘している⁽²⁷⁾。

要するに、家内工業が減少しこれに替わって賃労働による工場が増加したというのであるが、実際、表 13 に示されるように消費税導入後の 1933 年には、多くの地域で賃労働者を雇用して生産を行う製造所の数が増加している。こうした変化が生じたのは、条令の 33 条 1 項に、工場には「そこで煙草製品の小規模販売が行われる店舗(winkel)その他、如何なる施設をも併設することは認めない」とあり、また 37 条では「店舗その他、そこで煙草製品の小規模販売が行われる如何なる施設においても、その製品を製造することは禁止される」、そして「店舗」とは「販売が小規模に行われる空間と理解されるのみならず、より広く、そこに他の部屋も含めてトコ(toko)やワルン(waroung)が造られている家屋であると理解される」と規定されていたからである。この結果、従来、多数のワルン所有者がそこで販売するストローチェを家族労働によってワルンの片隅で製造してきたが、それができなくなったのである [Reijden 1934:54-55]⁽²⁸⁾。この結果、例えば西ジャワでは 1930 年以来、恐慌の影響で多数のカウン・ストローチェ企業が閉鎖されたが、家内工業は 32 年末までその地位をかなりよく維持できた、しかし煙草消費税条令が 33 年初に施行されたため、多数が操業中止に追い込まれた、と報告される [Reijden 1934:108-109]。

もともと西ジャワの場合には、それに替わる工場はそれほどは増えなかった。表 13 で製造所数が増加したチェリボンの場合でも、ストローチェ製造所の営業許可が 33 年半ばまでに煙草消費税局 (Tabaksaccijnsdienst) によって 16 件交付されたが、このうち賃労働者を雇用して操業していたのは 9 軒だけで、7 軒は家内工業だった [Reijden 1934:98]。またプリアンゲルでは、「何人かの企業家たちは作業場を建てたり場所を移したりすることを恐れて控え、閉鎖を決めた」ので企業数は減少した [Reijden 1934:78-79]。

表 13 理事州別ストローチェ製造所数

	1929年	1930年	1931年	1932年	1933年	1934年
バンタム	-	-	-	-	-	n.a.
バタヴィア	13	14	16	17	25	n.a.
バイテンゾルフ	10	12	11	13	8	n.a.
プリアンゲル	36	41	46	46	34	n.a.
チェリボン	6	4	10	-	9	n.a.
西ジャワ計	65	71	83	76	73	n.a.
ジャバ・レンバン	66	79	105	195	269	n.a.
スマラン	13	33	71	113	129	n.a.
ブカロンガン	4	6	14	35	67	n.a.
パニユマス	15	28	50	60	31	n.a.
ケドゥー	32	40	56	66	78	n.a.
中ジャワ計	130	186	296	469	574	n.a.
王侯領	93	120	168	245	288	n.a.
クディリ	49	71	99	136	203	146
マディウン	13	20	37	56	113	121
ボジョネゴロ	9	17	25	45	58	35
スラバヤ	23	35	51	81	149	99
マラン	6	12	24	45	93	48
東ジャワ計	100	155	236	366	616	449
ジャワ・マドゥラ合計	388	532	783	1156	1551	

出所：Reijden 1934:110, 1935:168, 1936:119

これに対して中ジャワや王侯領、東ジャワでは、家内工業に替わる小規模営業所の設立によって、33年の製造所数はかなり大きく増加した⁽²⁹⁾。ただ、このような新設された製造所の経営は、その後必ずしも順調だった訳ではない。表示のように東ジャワでは 34 年には営業数は再び減っているが、それは 33 年に家内工業から賃労働へ移行した多数の営業の大半が変化した状況についていけず、生産を再び停止し、「特に 1934 年初めにはほとんどの認可が再び撤回された」からだった [Reijden 1936:116]。

(3)消費税と製品煙草の価格

表 2 に示されるように、手作りシガレットもストローチェも、1930 年代に入っていったん減産傾向にあったが、機械製シガレットとは異なって消

費税導入後には増勢に転じた。それではなぜ、それが可能だったのだろうか。小論ではこれまでこれらの製品煙草の価格の安さを、ライバルとの競争における有利な条件として挙げてきた。そこでここでは、価格面からこの問題を考えてみたい⁽³⁰⁾。

まず問題になるのは、消費税分は消費者に転嫁されたか否かである。Hoogesteger[1933c:1492]によると、輸入品は概して転嫁されたので値上がりしたが、現地産シガレット産業では一部は旧価格を維持し、一部は消費税分を上乗せした。しかし、ストローチェ産業は大半が旧価格で作り続け、基本的には転嫁しなかった。そして、それを可能にしたのは、既にだいぶん前から原料価格が値下がりしていること、また全般的な賃下げに合わせてストローチェ労働者の労賃も下がったことなどだった。

そして、それどころか消費税にもかかわらず、表14に示されるように価格はむしろ低下した。それは、バンデロールに記載される1パック当たり価格の推移を見ても明らかである。消費税の導入が計画された当初、この表示価格の最低は2セントだったが[Hoogesteger 1932:261]、フォルクスラートの要請により1セント表示のバンデロールが導入され、33年3月の時点ではそれが最もよく出ていると報告される[Hoogesteger 1933c:1492]。そしてストローチェでは、1933年の政庁消費税収入の中で1セント・バンデロールの売り上げによるものが総額に占める比率は52.8%だったが、34年には77.2%にまで上昇している。この年、1セント・バンデロールを貼ったストローチェは10億6757万8000パックが販売されたが、これは全販売パック数の91.9%を占めた[Hoogesteger 1935:71]。

シガレットの場合は33年との比較ができるデータは得られなかったが、消費税導入当初にはその税収「見積みりは、10本5セントという通常価格にもとづいていた」とあることから見ると、5

セント・バックが普通だったようだ。しかし、33年を通じてそれは急激に減っていき、代わりに「3セント以下」のバンデロールの比率が急増した[Hoogesteger 1934:370;1933b:667~668]。そして34年には、消費税額から計算すると最もよく売っていたのは3セント・バック(全体の46.7%)で、これに1セント・バック(21.4%)が続いた[Hoogesteger 1935:72]。ストローチェと比べるとなお高めではあったが、シガレットもやはり値下がりしたのであった⁽³¹⁾。

この時期の値下げは、次のような方法で行われた。1つは中味の質を落とし、小型化することである。例えば「ジャバラ・レンバンでは以前にはほとんど糸2~3本で巻いたより大型のストローチェのみ製造し、これにより良質の煙草を使用していたが、もっと安い値段でもっと多くのストローチェを提供したいという願望の結果、大型は完全に、中くらいのサイズのものも大半が市場から姿を消し、巻き糸1本で質の劣る煙草が主流となった混合物を詰めた小さいストローチェがこれに替わった。」[Reijden 1935:14]という。また、中ジャワ・王侯領全体をみると、原料煙草1カティから製造される製品煙草の本数は1929年、30年の900本から31年1000本、32年1100本、33年1350本、34年1500本と年々増えており[Reijden 1935:182~183]、1本当たり原料煙草使用量は減っていることになる。またクディリでも同様に、1929~31年には生産されたストローチェのかなりの比率が大型だったが、32年には小型ストローチェが増加し始め、また特に1934年にはいわゆる恐慌種、すなわち“rokok-obral”の名で知られているものが大量に製造された[Reijden 1936:8~9]。

次に一箱当たりの本数を減らすことが一般化した。ストローチェはかつてはほとんどが1パック25本入りであり、ワルンでは箱を開けてバラ売りしていたが、消費税導入によってそれができなくなり、この時期、25本入りパックはデサ住民には

表 14 1930 年代製品煙草価格の変化

地域	種別	年	価格	出所
ブリアンゲル	カウンス トローチェ	1932	小売 10 本包 f0.02, f0.025, f0.03	Reijden
		1934	小売 10 本包 2 個 f0.02, f0.025, f0.03	1934: 81-82
ブカロンガン	ストロー チェ	1929-31	卸し 1000 本 f1.15-f1.35、ワルン価格 25 本包 f0.03-f0.04	Reijden
		1932	卸し 1000 本 f0.65-f0.80、ワルン価格 25 本包 f0.02-f0.025	1935:
		1933 上半	小売 5-10 本入り袋 f0.01、時に f0.005、3 袋 f0.02/f0.025、 卸し 25 袋平均 f0.175(通常品)、小売 f0.08-0.1(obraal strootje*)	111-112
ジャバラ・レンバン	大型ストロ ーチェ	1929	卸し 1000 本 f3.60、小売 f4.40	Reijden
		1930	卸し 1000 本 f3.40、小売 f4.20	1935:14
		1931	卸し 1000 本 f3.20、小売 f3.80	
		1933	卸し 1000 本 f3.00、小売 f3.60	
	中型ストロ ーチェ	1929	卸し 1000 本 f3.00、小売 f3.60	
		1930	卸し 1000 本 f2.70、小売 f3.30	
		1931	卸し 1000 本 f2.50、小売 f3.00	
		1933	卸し 1000 本 f2.25、小売 f2.80	
	小型ストロ ーチェ	1929	卸し 1000 本 f2.50、小売 f3.00	
		1930	卸し 1000 本 f2.20、小売 f2.60	
		1931	卸し 1000 本 f2.00、小売 f2.50	
		1933	卸し 1000 本 f1.75、小売 f2.20	
	ストロー チェ	1933 初 半	小売 10 本包 f0.02、4 本包、5 本包 f0.01	Reijden
		1933 中 半	小売 5-10 本包 f0.01(中味の質、大きさ落とす)	1935:15
1933 上 半		卸し 1000 本 f1.85/f1.90-f0.65/f0.70、平均 f1.25(29 年比 50%低 下)		
バニユ マス	クレンバッ ク・シ ガレット	1929	卸し 1000 本平均 f4.25(上級品)、f2.10(下級品)	Reijden
			ワルン平均価格 50 本包 f0.25(上級品)、f0.12(下級品)	1935:
		1932	卸し 1000 本平均 f3.50(上級品)、f1.40(下級品)	126-127
			ワルン平均価格 50 本包 f0.20(上級品)、f0.09(下級品)	
1933	卸し、小売とも 29 年水準へ復帰 小売 10 本包 f0.05(上級品)、f0.025(下級品)、2 本包 f0.01(上 級品)、4 本包 f0.01(下級品)			
王侯領	ロコッ・ ワング	1929	卸し 1000 本平均 f1.20、ワルン価格 20 本包 f0.03	Reijden
		1933	卸し 1000 本平均 f0.80、小売 8-10 本包 f0.01	1935:156
クディ リ	ストローチ ェ	~1932	卸し 1000 本(50 本包/25 本包) f2-f1.25、 小売 50 本包 f0.11/f0.12、25 本包 f0.06-f0.035	Reijden
		1933~	卸し f0.01 包を 200 包で f1.60-f1.50、 小売 4-15 本包 f0.01、3 本包 f0.025	1936:9-10
マディ ウン	ストローチ ェ	~1931	卸し 1000 本 f1.60-f2(25 本包)、小売 25 本包 f0.05-f0.06	Reijden
		1932~	包当たり本数減	1936:76
グリッ セ県	ロコッ・ジ ヤワ	1932	小売 20-25 本包 f0.01	Reijden
		1933	小売 12-16 本包 f0.01	1936:
		1934	小売 18-20 本包 f0.01	87-88
スラバ ヤ・マ ドゥラ	ストローチ ェ	~1932	小売 50 本包 f0.075-f0.10、25 本包 f0.04-f0.05、 卸し 1000 本 f1.25-f1.60	Reijden
		1933	小売 4-8 本包 f0.01	1936:
		1934	小売 6-12 本包、15 本包 f0.01	97-98
マラン	ストローチ ェ	~1932	小売 25 本包 f0.06、10 本包 f0.025、5 本包 f0.01	Reijden
		1933	小売 4 本包 f0.01、5 本包 f0.01、6 本包 f0.01	1936:108
		1934	小売 12 本包 f0.01、8 本包(平均) f0.01	
	ヨーロッパ 産シガレ ット	1928	1000 本当たり輸入価格 f6.9**	I.V.1931:
		1929	1000 本当たり輸入価格 f6.8**	205-206
		1930	1000 本当たり輸入価格 f6.9**	

表註：史料に記載の価格の中で、変化が分かるものを選んで掲載した。fはギルダーを示す。

* 質が悪く、極めて安く売られるストローチェ。

**1000 本当たり重量を 1kg として、輸入総額を輸入総量で割って算出。

高価すぎるので、4-10 本入りの箱が登場し、また包装も簡単になった[Reijden 1934:46]。ジャバラ・レンバン理事州では、既に 32 年に 10 本入りパックを販売する企業が現れたが、これは同年の

第 4 四半期には大いに流行し、1933 年初には 4 本入り、5 本入り小パックも市場に出た。当時、10 本入りには 2 セント、4 本か 5 本入りには 1 セントのバンデロールが付けられた。しかし、これら

の価格もお高すぎるのがわかった。そこで今度は価格を1パック1セントに固定して本数を増やすことが試みられ、33年中にはバンドロール価格1セントの5~10本入りパックが主に売られるようになった。そして、このために中味の質を落とし、また形も小さくされた。レンバン県では34年5月には12本入り、15本入り1セント・パックさえ発売されたという[Reijden 1935:15]。

クディリ理事州でも煙草消費税導入まで50本または25本入りパックに詰められたストローチェが前者は11セントか12セント、後者は6~3.5セントで小売りされていたが、消費税導入後は4~15本入り1セント・パックが主力商品となった[Reijden 1936:10]。またスラバヤでは消費税導入以前には50本入りが7.5セント、25本入りが4~5セントで売られていたが、導入後は1セント・パックが主力商品になり、33年には4~8本入りだったが、34年には6~12本入り、若干の営業では15本入りまでに増えた[Reijden 1936:97-98]。マランでも当初は25本パック6セント、10本パック2.5セント、5本パック1セントで売られていたが、33年には4本、5本、6本入り1セント・パックが主流になり、34年には中味が平均8本、最多では12本にまで増えた[Reijden 1936:108]。

4. 手巻きストローチェと製品ストローチェ

このように製品煙草、とりわけストローチェが大幅な値下げを進めたのは、一般的には不況による住民購買力の減退に対応したものであるが、とりわけこの時期には手巻きストローチェに対抗してシェアを確保することが課題だったからである。

Reijden[1934:116-117]によれば、多数の消費者は1930年以來の不況の中で、節約のためにストローチェ原料を別々に購入して自分で手巻きするという、古くから行われてきたやり方を復活させた。この場合、同じ金額で約2倍の喫煙材料を入手可能だったという[Hoogesteger 1933a:74]。そして、

それらは未包装で販売される限り消費税がかからないので、消費税導入とともにそういう形で製品煙草を製造・販売する業者が増加したと考えられる。西ジャワ・スメダンの例では、それは次のようだった。

ここでは1932年3月にあるストローチェ企業家はその製造を止めて小包装の原料煙草の商いに転向したが、彼がいうには、それは以前の顧客の多数が再び自分でストローチェを巻くようになったからだった。こうした煙草の小商いはバンドンやその周辺では以前から見られたが、不況によりかなり増加したという。この場合、煙草は圧縮され長さ8~10cm、幅3~4cm、厚さ数mmの、巻かれて紙に包まれたもの1個2~2.5セントで売られるが、それはストローチェ40~50本分に相当する。他方、カットされたカウン葉の上巻は、約80枚入りの包みが1セントである。だから最低でも40本の手巻きストローチェ相当量の原料が2.5~3セントで得られるが、同じ種類の工場製品は40本5セントで売られていた。

こうしたことから多数の企業家がストローチェ製造業に加えて包装煙草の小取引を始めるようになり、1932年までこの形の煙草商いはまずまずの利益を上げることができた。しかし包装には労賃と紙代がかかり、また1933年からは煙草消費税のために経費はさらに増加したので、売れ行きは落ち込むことになった。この結果、1933年初以来、大きな町のパッサールやワルンでも消費税がかからない未包装煙草が販売されるようになったが、売れ行きは極めてよかったという[Reijden 1934:116-117]。

工場製製品煙草と手巻きとのこのような競争の帰趨がどうなったのかは、定かではない。一方では、1934年の「クレテック産業は、クレテックを10本1セントで市場に出すことで、手巻き煙草との競争に勝つべく真剣に努力している。この損失を伴う試みは当初はうまくいかなかったので、14

本入りを出したがそれでも手巻きを防ぐことができなかった。』[Sigarettenfabrikatie 1934:588]という、手巻き優位だとする評価がある。しかし、クドゥスでは「33年には煙草消費税の結果、手巻き煙草消費者が激増したが、クドゥスの製造所は本数が少ないパックの販売へとシフトして小売価格を可能な限り低く抑えた(1パック1セントで販売)結果、急速に若干回復することができた。』[Reijden 1935:172~173]というような記事から見ると、手巻きに対抗した値下げが功を奏したといえるのかもしれない。

おわりに

小論では植民地後期インドネシアにおける製品煙草の推移を、競合関係に着目しながら述べてきた。ジャワで製品煙草の製造が始まったのは1850年前後であり、19世紀終わりにはストローチェの商業的生産も始まったが、市場が拡大してシガレット輸入が急増し、製品煙草の製造が本格化するのには1910年代後半以降だった。こうした中で、とりわけ輸入シガレットと現地産シガレットは市場をめぐって激しい競争を展開したが、20年代に行われた輸入関税引き上げと、それと関連したB.A.T.を初めとする企業による機械製シガレット生産開始によって、現地産シガレットが一挙に優位に立った。しかし、同時にストローチェ産業も大発展した。とりわけクドゥスから始まったクレテック・ストローチェは東ジャワにも第2の中心を生み出し、この産業内部で激しい市場獲得競争を繰り広げつつ、全体として生産を伸ばし、シガレットとも激しい競争を展開した。1930年代に入ると不況の影響下で価格の高い輸入シガレットは激減し、また植民地政庁の一連の産業保護政策によって機械製シガレットに制限が加えられた結果、手作りシガレットとストローチェが大増産するこ

とになった。しかし、これらは同時に手巻きシガレット、手巻きストローチェからの挑戦を受けねばならなかった。こうした中で、シガレットやストローチェは、ぎりぎりまで価格を下げることによって、これに対応したのだった。

いずれにせよ、このような状況の中でジャワの製品煙草製造業は全体として発展を続けた。植民地期も終わりに近い1939年、これらのオランダ領東インドにおける消費量は原料煙草に換算して65,900トンで、消費者が自分で巻く「手巻き煙草・ストローチェ」がその57%、シガレットが23%、ストローチェが9%、現地産シガーが7%、シャグが4%を占めた。これを本数に換算すると、現地産シガレット152億本(このうち機械製シガレット77億本)、輸入シガレット2億9400万本、ストローチェ151億本、現地産シガー11億本、輸入シガーが1500万本だった[栗林1941:119]。これが、競争の1つの帰結だった。

註

- (1) 例えば Reid[1985:535-538]によると、マタラム王国のアマンクラット I 世(1646-77年)は宮殿外へ出る際、常に供の女官の1人には煙草とパイプ、もう1人には火を持たせていたという。
- (2) これらの製品煙草に使われた原料煙草について、K.V.[1910:205~207]はケドゥー煙草のうち「薫り豊かで力強い種類は、刻まれて原住民市場へ向けられる。それより劣る種類はトゥマンゲンとアンバラワのシガー工場のためにブラッド煙草として商われ、クロソックはヨーロッパへ船積みされる。」と述べ、シガーにはあまり質のよくないものが葉煙草のまま使用されるとするが、翌年の報告には「刻み煙草はトゥマンゲンとバラカンでシガレットに加工される」[K.V.1911:

204~206]とあり、シガーとシガレットの双方が製造されていたこと、後者には良質品が使われた可能性があることが窺える。

- (3) マゲランの煙草製造業の評価は、史料によって大きく異なっている。『福祉減退調査』によればそれは1デサに限定され、従事するのは数人だけで意味は小さかった。また製品の質も悪く、マゲラン市で販売するのみだった。そこには華人シガー工場も1軒あり、原住民労働者を使用していたという。他方、『植民地報告』は、ここで製造されたシガレットはジャワの他地域と外領に販売されていたという [K.V.1905:232~233; 1906:226; 1908:246]。
- (4) なお、19世紀には早くからマニラシガーが輸入されていた。そのジャワ・マドゥラの輸入額(5年平均、単位1000ギルダー)は以下の通り。

1820年代後半	48	1830年代前半	386
1830年代前半	113	1830年代後半	540
1830年代後半	120	1840年代前半	1,219
1840年代前半	189	1840年代後半	602
1840年代後半	209	1840年代前半	712

出所：C.E.I, vol.12a: table 5A

マニラシガーの輸入が1860年代前半をピークにしてその後減少するのは、輸入全体が減ったことを意味するものではない。後に見るようにジャワ・マドゥラのシガー輸入額は1880年代後半から減少傾向に入るが、1910年代~20年代には激増している。むしろ、1904年のある報告に「東インドでは以前、ほぼ全てマニラシガーが吸われていたが、後、それはほとんど全てオランダシガーによって駆逐された。」[Rapport Nijverheid 1904:117]とあるように、19世紀後半になると次第にマニラシガー以外のシガー輸入が増加してきたと考えられる。この

報告によれば1904年第1四半期のジャワ・マドゥラのマニラシガー輸入は3,508kg、その他のシガー輸入は31,981kgである。この傾向はその後も続き、例えば1911~13年のジャワ・マドゥラのシガー輸入235トン、258トン、289トンのうちマニラ産は25トン(10.6%)、20トン(7.8%)、24トン(8.3%)にすぎなかった[V.H.N.L.1913:144]。またオランダからのシガー輸入量は1921~28年についてデータが得られたが、順に156、127、132、125、157、139、150、156トンである。これは蘭印のシガー輸入量のほぼ半分に該当する。K.V.[1925:211~218; 1926:223~233; 1927:225~233; 1928:215~224; 1929:207~220; 1930:191~222]を参照。

- (5) 1930年代のデータでは、煙草と丁字の混合割合は煙草10に対して丁字3~7程度、最も一般的には10対5であった。なお、これ以外にこの種の煙草では様々な成分からなるソースをかけてさらに香りを付けることが当時から行われ、現在に至っている。Reijden[1934:18]、Soenario[1935:33~35]、Hanusz[2000:90~97]等を参照。
- (6) 煙草に追加される混ぜ物(woorあるいはwoerと称される)は安息香(menjam)、クレンバック(klembak=大黃 rabarber の根)、クババ(kemoekoes)、カユ・マニス(kajoe manis)、ナツメグ(pala)、アダス(adas)、プロサリ(poelosari)、プチュック(poetjoek)、ガンティ(ganti)、トゥガリ(tegari)、チュンドノ(tjendono)、メソイ(mesoji)、ワロン(waron)、クラブット(klabet)、ドゥパ(doeпа)など、極めて多様だった[Reijden 1934:12~13]。
- (7) Reijden[1935:124~125]は、ロコッ・ワンゲンとはロコッ・ディコからクレンバック・シガレットへの移行形態だと述べている。
- (8) 表示のように、製品煙草輸入では20世紀に

はいると外領がジャワを上回るのが、特徴である。この理由を十分なデータにもとづいて説明することは困難であるが、本稿でも述べるようにジャワ・マドゥラが現地市場向け煙草生産の中心であったのに対して、外領ではごく一部を除いてそのような生産が行われていなかったこと、さらにシンガポールとの商業上の関係が密接であったので外国煙草が入りやすかったなどの事情が、このような状況を生み出したと考えられよう。

- (9) 同様の内容は 1920 年の報告にも見える。この年、ジャワ産シガーはスカンジナビア諸国やその周辺の東方の国々にかかなりの量が卸輸出され、またオランダへも郵便小包によって販売されている[V.H.N.L.1920:202]。ジャワで生産されるシガーの質については工商局の 1917 年の出版物に「残念なことに質、特にシガーのそれには改善の余地が大きく、またその製造にはしばしばしっかりと注意が払われることがない。疑いなしに、この地におけるシガー工業は通常の状況でも将来性があるが、その場合には技術的にヨーロッパ製品に劣らない、少なくともそれに近い製品を出荷するよう努めなければならない。」[Ontwikkeling Nijverheid 1917:26~27]と指摘されていたのが、一部で急速に改善が進んだのである。
- (10) 中心地の 1 つケドゥーに於ける 1920 年代初めのシガーの製造方法は「原始的方法」と「近代的方法」に明確に分かれており、前者は大衆品のため、後者より高価なシガーにだけ適用されるという。詳しくは Tabak[1925:188~189]、Vleming[1925:188~189]を参照。
- (11) シガーの 1939 年の製造量は 11 億本であり、製造工場は多数に上るが、Negresco(オランダ資本、マゲラン)、Aroma(華人資本、クドゥス)、Tieong Sing(華人資本、トゥバン)、Kaw Kwat Yee(華人資本、マゲラン)が四大工場であり、とくに Negresco が半数以上を占めた[栗林 1941:133~134]。なお、1920 年代前半には seroetoe-omblad、cigarillos などと称される様々な安価なシガーが製造されていた。これについては Tabak [1925:189~190]を参照。
- (12) 同様の内容は V.H.N.L.[1921:184]にも見える。
- (13) 同様のことは、翌年の報告[K.V.1923:207~208]でも「外国向け販売は不可能だったが、それは高い船賃と、英領地域(Britisch gebieden)に関しては高輸入関税のためだった。」と指摘されている。ジャワ産シガレットはもともと基本的に内地市場向けであり、1910 年代前半の輸出(最も多いのがシンガポール向け、他にオランダ、中国、香港向け)は 1912 年 3,299kg、1913 年 4,168kg と僅かだったが[V.H.N.L.1914:200]、16 年にはオランダ向けなど輸出が大きく伸びたという[K.V.1917:240; V.H.N.L.1916:203]。しかし、20 年代に入ると、関税障壁に阻まれて輸出は激減し、専ら内地市場を目指したと考えられる。
- (14) 1930 年のスマラン理事の引継覚書によると、同社は 1920 年代を通じて規模が非常に拡大したという[Memori Residen Semarang 1930:56]。もう一方は Ko Kwat Ie の工場で、そこは十分な需要がある場合には 1 日 50 万本の供給能力を持っていた。なお、機械生産では円筒形シガレットしかできず、ジャワで需要の多い先細形(puntmodel)の製造は手作業による。Mac Gillavry 社では 100 名ほどの女性が従事し、1 人で 1 日 1000 本程度を作っていた。製品の包装作業はほとんどが手作業だが、Mac Gillavry 工場は 10 本入りパックの包装には機械を使った。しかし 20 本入りカートンは、まだ手で詰められている。包装賃金は 50 箱当たり 3 セントで、普通の女性労働者の場合 1 日に 35~40 セント稼いだ[Tabak

1925:193, 194]。

- (15) なお、これらの中で大半を占めるクレテックについては、Segers[1982:bijl.1B (p.7~11)]が丁字輸入量から生産量の推計を行っている。ただし、その数値には表2とはかなり異なる部分もある。
- (16) Mangoenkoesoemo[1929:14]によると、クドゥスから西ジャワ向けの輸送はスマラン・チェリボン蒸気軌道で行われていたが、彼が調査した1928年10月の輸送量は全部で650籠、約32.5トンにすぎなかった。
- (17) 東ジャワ産クレテックは、この他にスマトラ、バリ、ボルネオ、セレベスにも販路があったという。
- (18) クレテックに使われる丁字はザンジバルからの輸入品が大半であったが、28年にはそこで凶作が発生したために価格が高騰した。これについては、さしあたりV.H.N.L.[1928:178~179; 1930:380~382]、K.V.[1929:221~222]などを参照。
- (19) Mangoenkoesoemo[1929:44]によれば、クレテックの煙草と丁字の混合比率は煙草10に対して丁字3~7であるが、煙草10、丁字5が最も多かった。なお、使われる煙草は1種類だけではなく、7種類も混合することさえあった。煙草混合物をどのように作るかに製品の質、味と製造コストがかかっており、この作業は専門の煙草混ぜ職人(しばしば企業家自身)の手で行われる、全工程の中で主要な作業であった。
- (20) これと引き替えにシガレット巻紙に対する付加関税は撤廃された[Stbl.1936,no.1, 2, 3]。
- (21) I.V.[1931:205~206]には1928~30年のシガレット輸入量と輸入額が載せられており、これにもとづいて1本当たり輸入額を算出すると0.68~0.69セントになる。これに輸入関税分を加えると1本当たりの値段は1930年末まで0.84セント、31年は0.855セント、32年初~6月14日0.87セント、それ以降は0.915セントとなるが、小売りされる時にはさらに高くなると思われる。当時の現地産製品煙草の1本当たりの小売り価格をいくつか挙げると、クドゥス産ストローチェは1930年に大型が0.42セント、中型0.32セント、小型0.26セント[Reijden 1935:14]、バタヴィアでのストローチェのワルン価格(~33年)は0.14~0.15セント[Reijden 1934:58~59]、ブカロンガンでのストローチェのワルン価格(1929~31年)は0.12~0.16セント[Reijden 1935:111~112]、パニユマスのクレンバック・シガレットのワルン価格(1929年)は上級品0.5セント、下級品0.24セント[Reijden 1935:126~127]、マランのストローチェ(~1932年)は0.2~0.25セント[Reijden 1936:108]、手作りシガレット(1932年)が0.5セント[Hoogesteger 1933b:667]などであり、輸入シガレットは何れと比べてもかなり高いといえる。
- (22) 機械製シガレットの30年代初めの価格についてはデータが得られなかったが、栗林[1941:124~129, 131~132]によると30年代末、B.A.T.の最も大衆的な製品、ファロカの一番代表的な製品であるダフロスはともに20本入りバックが12セントであったのに対して、手作りシガレットは1包み1~3セント、ストローチェは上級品が3本包み1セント、普通品6本包み1セントであり、価格には相当の開きがあった。
- (23) Castles [1967:37]もこのOorschotに依拠して同様の見解を述べている。
- (24) なお、同条令は38年に若干改正された[I.V. 1939:175]。ところで当初、これら大手企業の原料煙草は大半が蘭印外から輸入されていた[Memori Residen Cirebon 1930:253]。しか

し、やがて B.A.T. は 1929 年、これに適したバージニア煙草の栽培試行をボジョネゴロ県の住民栽培の中で始めた。この栽培は 34 年から本格化し、その面積は 29 年の約 140 ヘクタールから 34 年 900 ヘクタール、35 年 1,300 ヘクタール、36 年 2,500 ヘクタール、37 年 3,900 ヘクタール、38 年 6,800 ヘクタールへと急速に拡大した [I.V.1936: 69-70; 1937:87; 1938:79; 1939:102]。したがって、蘭領東インド産原料煙草使用義務づけは、少なくとも B.A.T. にとっては困難な条件ではなかった。いずれにせよ、これをきっかけにレンバンでは新しい品種の栽培が拡大していった。また B.A.T.、ファロカの 2 社はボジョネゴロ以外にマドゥラ、そして特にプスキで住民煙草を原料として買い付けた [植村 1997]。こうしたこともあって、1930 年代には原料煙草に占めるジャワ産煙草の割合が高まり、逆に輸入葉は減少した。詳しくは、栗林 [1941: 143-144] の統計を参照されたい。

- (25) スラバヤでは表示のようにこの時期には一貫して減っているが、それはこの時期にストローチェ産業が勃興して手作りシガレットを凌駕したことによる。この地域では家内工業によるストローチェ製造は 1900 年頃にまで遡るが、工場製生産はクレテック・シガレットの方が先で、1914 年には華人経営の大規模工場が生産が始まり、17 年には 2 番目の華人企業が設立された。他方、この地方のストローチェは当初は丁字も煙草ソースも全く使用しなかったが、1920 年以来、クレテック・ストローチェが増加するようになり、21 年にはジョンバン県、24 年シドアルジョ県、27 年モジョケルト県、そしてスラバヤ県ではようやく 28 年になって賃労働生産が始まった。その後、生産

は急速に増加し (1929 年 85 百万本、30 年 95 百万本、31 年 100 百万本、32 年 105 百万本、33 年 230 百万本、34 年 256 百万本 = これらにはマドゥラ産を含む)、表 11 に示されるシガレットを上回っていった。詳しくは Reijden [1936:95-97] を参照。

- (26) 栗林 [1941:124-129] によれば N.V. Trio Sam Hien Kongsie (クドウス)、Tio Swie Lian "Soerabajasch Sigarettfabriek" (スラバヤ)、N.V. Handel Mij. "Sampoerna" (スラバヤ)、Sigarettfabriek The Djie Siang (トゥバン)、Sigarettfabriek Indonesia Handelsmerk "Marikangan" (スラカルタ) が、特に規模の大きい工場だった。
- (27) 対照的に東ジャワでは、家内労働者数は確実に増加し続けたと指摘される。この差は、東ジャワの家内労働者の大半は事実上は工場雇用者と見なしうる倉庫労働者 (depot workers) から構成されるからだといわれる。詳しくは C.E.I. [vol.8:171]、Reijden [1935:175; 1936:124, 145-146] 参照。
- (28) ワルンとは、竹や木で造られた簡単な構造の小さな店、または屋台のことをいう。これに対してトコは造りがしっかりした、比較的大きな店のことをいう。また「店舗」という訳語を当てた winkel はオランダ語であるが、ここではワルンやトコを含む一般的な店の意味で使われている。
- (29) 例外的にバニユマスではクレンバック・シガレット工場数は 1929 年の 15 軒から 30 年 28 軒、31 年 50 軒、32 年 60 軒と急増し、生産も激増したが、33 年には 31 軒へと一挙に落ち込んだ。消費税導入の際に、ごく小さい規模の工場所有者が営業許可を申請しなかったことが原因だという [Reijden 1935:125-126]。
- (30) これらの減産の一般的な背景としてはもち

ろん恐慌による住民購買力の低下があるが、ストローチェに関してはそれに加えて以下のような特有の事情があった。すなわち表8から明らかなようにストローチェの生産減は特に32年に著しいが、それは翌年に導入されることになった煙草税に備えて煙草消費税条例施行時に在庫がないようにするため、32年後半に数ヶ月間操業が完全に停止されたか、あるいは生産を可能な限り低く抑えたためである。だから課税1年目の33年の増産は、前年に生じた後退を取り戻さねばならなかったことと、賃労働者を使わないで操業してきた家内工業の大半が消費減した結果だった。34年の大増産は、この産業のさらなる分散が消費拡大と並行していたことを示している。32年の落ち込みがとりわけ激しいジャバラ・レンバン理事州の例では、クドゥスの多数の企業家が消費税との関連で価格と質を決めることが困難だったこと、また消費税導入後にどれほど売れるかが読めなかったことなどから、32年下半年と33年第1四半期に営業を停止したという。そしてその結果、クドゥス産ストローチェの移入が減ったブカロンガンでは、1933年上半年期の生産が8200万本、前年同期比82%増という未曾有の増産となった。詳しくはReijden[1935:110-111; 1936:141]を参照。なおSoenario[1934:5-7]によれば、クドゥスでは工場数は1932年12月末165から33年末175に増え、34年10月末には152まで減少したが、クドゥス県のストローチェ工場主が注文したバンデロールの税額に着目して33年と34年を比較すると、34年の税額はデータの得られた10月までで33年を上回っており、この年全体の生産は前年の530万ギルダーに対して650万ギルダーと推定され大きく増加している、営

業は全体的には安定しており、弱い工場はつぶれたが、資本力ある工場は増産したと述べている。

- (31) このことは、逆にいうと、ストローチェが貧乏人の煙草であったという、通説的理解を裏書きするものである。近年の研究ではHanusz[2000:25]が、「クレテックは1960年代に至るまで貧乏人の吸う煙草であり、特に中・東ジャワの農民、また建設労働者やベチャ引きのような低所得都市在住者の中で流行した。」と述べている。

[引用史料・文献目録]

- 植村泰夫 1997:『世界恐慌とジャワ農村社会』勁草書房
- 栗林源三郎 1941:『蘭領東印度に於ける煙草栽培事業調査書』協同煙草株式会社
- Bleeker, P., 1850: "Fragmenten eener Reis over Java", *Tijdschrift voor Nederlandsch-Indië*, 1850-1, 2
- C.E.I., vol.1: *Changing Economy in Indonesia, vol.1, Indonesia's Export Crops 1816-1900*, The Hague, M. Nijhoff, 1975
- C.E.I., vol.8: *Changing Economy in Indonesia, vol.8, Manufacturing Industrie 1870-1942*, Amsterdam, KIT, 1987
- C.E.I., vol.12a: *Changing Economy in Indonesia, vol.12a, General trade statistics 1822-1940*, Amsterdam, KIT, 1991
- Castles, Lance 1967: *Religion, Politics, and Economic Behavior in Java: The Kudus Cigarette Industry*, Yale Univ. Southeast Asia Studies
- Fruin, Th.A., 1930: "Iets over de Kretekstrootjes-Industrie" (*Blaadje voor het Volkscredietwezen*, 1930, No.10)
- Fruin, Th.A., 1923: "Kerftabak op Java", *Koloniale Studiën*, vol.7-2.
- Gegevens Nijverheid 1916: *Gegevens betreffende de*

- Nijverheid in Nederlandsch-Indië I*, 1916, Batavia
- Hanusz, Mark 2000: *Kretek, The Culture and Heritage of Indonesia's Clove Cigarettes*
- Hoogesteger, J.H., 1932: "De tabaksaccijns" (*E.W.*1932)
- Hoogesteger, J.H., 1933a: "De opbrengst van tabaksaccijns" (*E.W.*1933)
- Hoogesteger, J.H., 1933b: "Een en ander over de sigarettenindustrie in Nederlandsch-Indië" (*E.W.* 1933)
- Hoogesteger, J.H., 1933c: "De tabaksaccijns" (*E.W.* 1933) 1490-1492
- Hoogesteger, J.H., 1934: "Tabaksaccijns en tabaksverbruik" (*E.W.*1934)
- Hoogesteger, J.H., 1935: "Tabaksaccijns en tabaksverbruik in Nederlandsch-Indië" (*E.W.*1935)
- I.V.: *Indisch Verslag*, 1931-1941
- Jasper, J.E., 1915 : "De Beteekenis van de Tabakcultuur en Bereiding in de Afdeeling Toeban", *Tijdschrift voor het Binnenlandsch Bestuur*, vol. 49
- Jonge, H. de, 1988: *Handelaren en Handelangers, Ondernemerschap, Economische Ontwikkeling en Islam in Madura*, Foris Publications
- K.V. : *Koloniaal Verslag*, 1848-1930
- Mangoenkoesoemo, Darmawan 1929: *Bijdrage tot de kennis van de kretek-strootjes-industrie in het regentschap Koedoes*, Weltevreden
- Mangoenkoesoemo, Darmawan 1931: *De ontwikkeling van de kretek-strootjes-industrie in de provincie Oost-Java*, Batavia
- Memori Gubernur Java Tengah 1930: Memori Gubernur Java Tengah (P.J. van Gulik), Juni 1930, in *Memori Serah Jabatan 1921-1930 (Jawa Tengah)*, Jakarta, 1933
- Memori Residen Cirebon 1930: Memori Residen Cirebon (C.J.A.E.T. Hiljee), 3 Juni 1930, in *Memori Serah Jabatan 1921-1930 (Jawa Barat)*, Jakarta, 1976
- MvO, Malang 1934 : Memorie van Overgare van de resident van Malang, 1934
- Memori Residen Semarang : Memori Residen Semarang (P.J. Bijleveld), 2 Juni 1930, in *Memori Serah Jabatan 1921-1930 (Jawa Tengah)*, Jakarta, 1977
- M.W. vol.VI^a, dl.1: *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, VI^a, Overzicht van de Uitkomsten der Gewestelijke Onderzoekingen naar den Inlandschen Handel en Nijverheid en daaruit Gemaakte Gevolgtrekkingen*, Batavia, 1909
- M.W. vol.VI^b, dl.2: *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, VI^b, Overzicht van de Uitkomsten der Gewestelijke Onderzoekingen naar den Inlandschen Handel en Nijverheid en daaruit Gemaakte Gevolgtrekkingen, 2de deel, Bijlagen*, Batavia, 1909
- M.W.H. Rembang: *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeelingsverslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar Handel en Nijverheid in de Residentie Rembang*, Batavia, 1906
- Ontwikkeling Nijverheid 1917: *De Ontwikkeling van de Ned.-Indische Nijverheid gedurende den Oorlog*, Batavia
- Oorschot, H.J. van, 1956: *De ontwikkeling van de nijverheid in Indonesië*, Van Hoeve
- Overzicht Ontwikkeling Inlandsche Nijverheid 1930 : *Overzicht van de Ontwikkeling van de Inlandsche Nijverheid in de Laaste Jaren [1926-1930]*, n.p., n.d, (Bibliotheek A. 4362, Departement van Kolonien)
- Rapport Nijverheid 1904: *Rapport van den directeur van onderwijs, eeredienst en nijverheid betreffende*

- de Maatregelen in het belang van de Inlandsche Nijverheid op Java en Madoera*, I, 1904
- Reid, A., 1985 : "From Betel-Chewing to Tobacco-Smoking in Indonesia" (*The Journal of Asian Studies*, vol.XLIV, no.3)
- Reijden, B. van der, 1934: *Rapport betreffende eene gehouden enquête naar de arbeiderstoestanden in de industrie van strootjes en inheemsche sigaretten op Java, deel 1, West-Java, Bandoeng*
- Reijden B. van der, 1935: *Rapport betreffende eene gehouden enquête naar de arbeiderstoestanden in de industrie van strootjes en inheemsche sigaretten op Java, deel 2, Midden-Java, Bandoeng*
- Reijden B. van der, 1936: *Rapport betreffende eene gehouden enquête naar de arbeiderstoestanden in de industrie van strootjes en inheemsche sigaretten op Java, deel 3, Oost Java, Bandoeng*
- Segers, W.A.I.M., 1982: "De strootjesindustrie in Nederlandsch-Indië; een reddingsboei voor een bevolkings-economie in nood. Onderzoek naar het economisch belang van de strootjesindustrie voor de Indonesische bevolking in de periode 1919-1942." Doctoraalscriptie Rijksuniversiteit, Leiden
- Sigarettenfabrikatie 1934: "Sigarettenfabrikatie" (*E.W.* 1934)
- Soenario 1935: "De kretekstrootjes-industrie in het regentschap Koedoes", *Volkscredietwezen*, XXIII Stbl. : Staatsblad van Nederlandsch-Indië.
- Tabak 1925: *Tabak. Tabakscultuur en Tabaksproducten van Nederlandsch-Indië*, Weltevreden.
- V.H.N.L : *Verslag van Handel, Nijverheid en Landbouw in Nederlandsch-Indië*, 1913-1930
- Verhooging 1940: "Verhooging van den tabaksaccijns" (*E.W.* 1940)
- Vleming, J.L. 1925: *Het Chineesche Zakenleven in Nederlandsch-Indië*, Weltevreden,
- Vries, E. de, 1935: "Bedrijfsgeglementeering van de sigaretten-industrie", (*E.W.* 1935)
- [付記]
- 本稿は平成 16-19 年度科学研究費補助金(基盤研究 (C)) 「植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究」による研究成果の一部である。
- (広島大学大学院文学研究科教授)